

笠塔隨筆五

目錄

松井藏書

- 一 皇居御湯 一 寶 瘵  
一 十津川 一 鶴 倉  
一 遊水車 一 七里の渡  
一 隆 及 一 急流五考  
一 小苦野 一 施鳥川  
一 比良嶽 一 海 布  
  
~~二 不破大國~~

一  
神  
泉  
苑

一字派濱園集

一牛公達集考

一  
詩  
僊  
袁

一降足松

羅波梅

一  
米  
麻  
門

一呈波定稿

一名不名物

弘智法師

一  
御  
業

一  
清茶瓦松茶

一  
卷  
九  
册

一  
竟  
作  
爲

一  
高  
市

一部の第七

送侯隨筆

卷之三

本校里にて遠く東北の方とすらて皇表の方後と指  
さしりて是を傍よ任せし人候も多うて源氏、いわく同に  
玄氣と見て至せらると言ふも此等異邦の人々もや式  
秋波をうながす松圓の人が如てかくらひうまたむかし本  
支帝度の上へ仰へゆくも天井の陽をもて、楚辭をう、徐、白色  
の拂ふと振るすづらく又はうきあうきと氣せらやかに爲きる事  
うらじく地縁りの御見も頗るむれりはもうちまといのねどもく  
要く況ほくまえ氣い松圓とあくびくいすこ寄る  
都よりまへまへまへまへまへまへまへまへまへまへまへま  
是處ふい氣と無づく、うそだまの事とてそそく血吸山まへ  
動く者うら人うらて曰余圓の心事と、他の方をむかへ歎の従ひつる

有傳ありてを傳の少ひ兵二つも力もとく行ひるを以て船  
と多きうりすすへ圓くどう教(教)へんと用ひまつり  
しや先手を都たしめと事よりか次より國の法度こうどとの合  
とくに御林佛園の法務忙殺とのことく、人康節先生を譽  
懷緑よ曰居後後有立喜一、喜多ニ善人ニ喜多ニ喜多ニ善  
物四衣三住系立森多ニ大體ともと又見京氏萬儀秋郊京源  
文車と十ねうふ不偶と莫爾を一丁水太夫と風景  
和一門と門徒と風俗名と美徳多く七言集あ多くハメ文  
籍多く九月食工多く十日学者多くとくに東坡と志  
惟文今文苑の世とて人故莫とぞす下車と下雅と志公也  
太平の潤化うとく一絆秋紀本と高貴懇因史子同古く愚や平直  
今之愚や平詔已耳とくに誠うる凡人人仰くやまく本とく実  
体のすくに眷勤せう元振の來テ十二歳の次室町ニ修南と稱本  
勘十角とそ古書画うとくの因利者一せとく、清方勘十角とく矣  
名セとく是ハ衣服トク是處り事すかく止むとくの為とくを用

麻屋根瓦柄絞玉腰よりはとくとくのうすとくとくの良物野菜  
も平四(清)の押板と舞うせう是全く黒とらじよあくば天代路み  
えひとやもわくねびうりゆうと先家店も表二階の板子連で  
板子の厚あとて鉢底の大木板ハ仰すと行を行ひて是も清  
と遊んで店先接えり、多よちと店主費本とまを貰の度と模様に  
しゆうと教半度と泉玉とまを賣與と教半養正りうとせう  
居間の二階(階)と櫛やう山階とと原板造とさわうと櫛付  
小色と障戸の壁とと白壁とと一色と美鶯と水と画く天井ハ  
紙と漫画く右画とみて支張りうとせと大やうと行はくとて左と  
令和と開て行のひと居せう佛光をとまうと鳥居西と行院所とよ  
所と入浴すと三面鏡と角倉十官食醍醐食とと廿内十官食  
倉此町うしと家作持うる本豆聚とまうと長押の段行の見あ  
院ととえば元禄の久遠の段行の段行の段行の段行の段行の段行  
て用ひうれ希うりしき世人來うて見る者多く傳て自らと名

度て行医所としのちりせし

封疆

邦畿としま東松岡史より、い奉使天皇二年春正月報より元畿内東ハ尼壁授行行す。南へ紀伊足立、西へ赤石梯梯開萬トシ。火立に徒く浪合役役す。中と威とく海平太尾、豊臣秀吉公伏見城下城より、美内内トクアシタ。わく京町中の民あひ物拂拂く。旅古通に築のえ札。布町の度セラ御と情とを高橋晋隆。余一をひち外中中の場より被堤と築築し。後又の價は更更めて築築を。唐の後塘と類類と報。之を運運す。と年後先の價は更更めて築築を。大もとしよ。よ。之に仁。たれ大もとしよ。の皇居の構造構造にて、大もとしよ。よ。之を移の後後に場場に本圓寺本圓寺。小寺庵と築築し。之を鑿鑿す。と豆源豆源と書書す。人済済も。併しも。人済済も。

山姫

鐵政鐵政。信州若狭守。系譜をもよ上道下道行行ばら紙紙と二篇

の大紙大紙ふるそ多くの若狭と紙紙と。もとと格格くもせら門禁行行く。そ  
中と。若易若易と。かく。雖雖き。路路うれが。歴歴と。す。が。事事。ん。ど。く。ば。け。歴歴と。あ  
れ。こ。と。は。あ。信信と。と。功。徳。賜賜。れ。こ。と。火。利。り。け。れ。と。と。京。裏。門  
ト。リ。五。里。上。の。村。木。よ。一。の。林。と。と。者。一。火。燒。の。行。レ。不。う。う。と。と。京。裏。及  
及。相。さ。く。鳥。店。の。形。よ。仰。す。仰。す。と。と。路。の。急。と。と。も。う。東。と。急。く  
禁止。は。と。火。燒。の。上。方。方。に。け。う。の。三。道。と。い。不。害。上。道。行。上。路  
う。ん。か。一。行。進。く。路。一。山。宿。也。と。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。山。燒。よ  
ま。ま。と。と。と。と。

十 本門

人間。四。左。野。於。行。勢。犯。侵。の。一。列。と。授。す。うち。那。の。度。キ。東。大。秀。  
玉。二。を。二。す。も。す。二。も。る。大。豈。秋。迦。、敵。の。つ。く。も。と。主。ひ。そ。い。  
あ。ら。若。済。く。冬。そ。び。て。山。懷。十。本。門。と。紙。牛。の。川。の。津。う。ひ。と  
く。も。石。と。う。セ。う。場。門。而。育。く。圓。信。の。序。と。そ。  
本。源。ふ。十。本。の。川。と。も。よ。う。煙。や。民。の。家。店。う。う。ん。  
走。或。の。以。芋。ク。深。底。固。と。ぬ。不。と。と。五。色。小。京。村。門。中。本。門。河

御内湯原地等と八度目にして

三芳序のひのちうま五十津川の水の木もあれは毎や  
袋上ちうむ貢免許の使してあるかあらぬ事の巻入  
さをり府公尊と勅しきうさんへ參事のひかへ大倭主復良  
被主の八度目とれども當く泥れ店のうちにかのは勢して波  
さりて左敵よせ外の境界として一舟軍家津と原よりす  
財へち走の駄はと拂と二度の所拂と無事あへといせよとよ  
本往とし

鶴岡

義徳園長樂門りて鶴岡とをり余國よりもむき鶴岡に在り  
舟を艘よだれくニシ原とも人初阿法師天高路起業<sup>雄</sup>長樂門の  
水とドリ猿武縫の橋舟門を徒とを下り一艘の舟每と船先に  
篝火と焚きを放きて後う水と輝く鶴岡人をそびい布やく  
白と燐るん蓑とぬとひたのり十二舟の鶴魂と氣をそねねと  
さる或に生度すとふを總と長くとくと奥と若て浮りうふを纏

と寝くとれてゆくとよて備えぬと喰せて人鶴とちへ放  
つを浮くと海と半と半ゆうと人肩へたのよと放てゆだととあ水よ  
医るやくと大船とて十二舟の鶴たの松若らしく祥蹊  
く船へよすと手の後とて掉とすの或つてうて声たとよ  
ハ莫と聲ひかてうる向ひうねとあへきと仰りわく室と門  
リ（りう）走人鶴岡とや本の鶴園の音と鶴園教といは被主と  
亦唐書より付葉と鶴園の巧み取わと元いたれい友もとうめ  
とえすとおひともねもひる本とひかるの西門東門と鶴園と  
て日毎の体術と角をまじとまよとソの以下とくも本とくれて  
今のかへ山のあらううとて、かくしのあせらもととだ

都の元

度刻日本と醍醐雲林院の危険城吉野の山林もくは文忠名  
な（あやめ）と春とそぞろ狼（或後）と雲林院度して後がち  
什物醍醐へ移する友とひ入もと之邊城の荒山（吉野の林と梓  
植すをす）とゆうと依てかくとあふ相付せらまよへりとば

暖瓶の在席と此のまゝと席て後室の二つは後方今集よ崩  
字と在席の様と移り枕のひくまの所アシカ

え毎日とひやもてこを壁のをへまつてと宿す事  
因より西砂保の庭園の在所としと沙上に邊野の氣様と云  
今上之妻南新町西より移附所ひき沙門業へ一事より信尋公  
と京橋殿と称して、ハシ助下とよりと見附門の在い紀  
よは素人、未だ豈寺接致の達として而後と並られ、と之時月  
行より貞永二年二月廿日見附門のをを開くと今も上京橋の  
櫛子尾山の門の名あとて見附門町根本町の名なりを更に  
今のが忍院へ魚に起て曰を原山、唐大の天台山と移して廣尾  
尾山の名の塔院埋化タリ教導もとをの照らすとちくを六傳  
谷城のあり行り遍照院の役にて不して危いの危すとしてを協  
かねりせの和合ねと魚づば  
はとすくと上りをとて思ひやうす向う法のをはん寺  
一條御門より大窓をあとて六傳院の里亭へゆるまき豈寺の櫛

うううう御の居集めのうううう暫く立候ひをとよ  
りて傍より餘がれ和合一首と書く枚と残付アリ  
はおとがもしや生れなんといふ裏から浮遊する  
太閤御へ墨石等をせられて、いは教導やんを以て本院中  
ト生きては室の修とひきうち一組は御のとひり立之字  
梅むらさきとて改めるとせよと因勅とてうううう

### 淀水車

前述の城の外西小の方大門の中より水車二つと車大サ指揮  
八間から四つ取扱み廻り、而程まつてぬま平床入じ  
川おと義中へ汲み入れためニ是れ名水の用とて城内の事もわ  
らん年々汲水の貴重亭ととども一トアリ、ある名  
わうしたぐよをゆく鐵亞とつて構まず本集

仰りやう淀は背後の水車とよどもとて石舟を樹けら  
けをの裡裏名庭とてに歴の跡奥よ材立ちよ車下の船  
うては門の石庭とひ危丁駒と走る起一本城主の徳儀と報

往西りて山海の滋味ねども、蟹の体うなづき  
と行東のち御用船も、是もいかで車下の體ノ、や波國の名産を  
うなづき、遠路のゆりて、はいとほす、支那も、日本相處の徳儀  
因て、まちうのゆゑと、ソよきに、たまびらの蟹、夷酒と  
漫ノリ、ひそけ湯ノ、波の蟹ハ、かく數々漫ノリともけ清々と  
ゆるべ、まことに人丈尋、立て、ひゆて、聽き入る。

## 庚午冬の體是を度金

七里入波

僕舟あらず、伊勢尾張の向こうの海、と白く見えて  
は、方後撰集、入れ、と云々、七里の後、伊勢の東、  
尾張のまゝ、波、性古、と向遠の海、と云々、  
も、内のみの舟、くるを、め、舟、と、黒ぬ、そし、西まの舟、人  
主よ、向遠の海、と、いふ天皇紀元年六月丙戌是日  
天皇高丽、奈良郡家停以不進、時乙未之日、皇子を使於奈良  
府家以奏言、延唐、叶不以政不從宣、伊豆前郡日天皇而皇后、不  
被と、傳て天皇は、海、と、白、后、と、の裏、いわゆ、と、名舟、と、

東流、再考

御用船、色海の下流、御用、と、次第より、かく、おふ、相迎、て、奥津  
うち、と、我、も、レ、と、人、を、遣、と、と、不、接、丁、け、と、て、余、舟、も  
ナ、人、を、遣、と、舟、斗、の、急、流、と、て、門、隔、於、間、と、名、舟、と、

は水と済まれて先年旱魃の附字済門水涸て怪岩奇石の名  
は見えても放れず平らに荒場となりて書紀より傳る  
龜石 梅嶺閣 泰見閣 仙姥巖 鶴唇閣 羣  
雲巖 金石 韶靈閣 今木巖 泉水 出巖  
竹せ岩 不動巖水門

右ノリノ石筋岩トテ岩と傳ハ門市トアリテ先ニ岩完成ニ  
事もあらん向テアニツヨリ面々入松、雪岩ナシトハ冰屋全  
タリ次第より本の細道トヨテ行て草木村の宿トテ炭少ニ  
タクゆしたばく以来、旅難トモテ渴水ナシシ度ナフルト  
恩役

余よ心鶴ニ音有り奉るゆく事本今左内ト後鳥取  
上皇は故ニ生産の付け松波向江ノへ連ニ有  
秋ニテハ前海ちとて源氏の海の荒ニ浪風あらへく吹  
き風ノカタ多らむるに大りて便に映候前を走る車駕とがち  
駿うへ藻流やくやとて何と櫻原の網うるるん  
多ら海客と通ひて曰松の初冬よ原と云ふと云ふ  
うと行と通くと付のソル木と云ふと云ふんが、帝曰候  
よと御オモ申じて、よもよも行人を雇ひてとちうりの  
化キテの後て燒火ノ一目もまく破竹子を掣代卷ノ所  
御幸船令の御ノ事不くアヒモ「竹東海康親王」を差  
ゆく委附ト源氏と云ふと云ふかと輔助小船と同様行方周延十  
里半巨竹艤舟と云ふ人一行寺奥の船舟と南國の海士氣附  
因山勝田寺と上皇の陵跡付り仰  
限ノソル、蓋ク御端の舟もさうあくねハ入りまの事

伏井製衣和人食ひ人びと奉るゝと家業と傳(すてを傳せしを)  
ゆひねんば、御奉も音トヨ似の不くされ、と人帝傳人坐リて  
くわのわく改名せられ、と、又南國の一島の村人よ源氏玉造と  
ど人佐度の本とてを京ト引付やも祝へくねく奉るゝ  
トキ祐の古事記、驛路の終とそのもとて拵あててそとしを  
高声の居朝うつしの太鼓の金石の音響よほきと驛路終  
声夜遇のちとひやまと入周間の大聖院門村氏の太鼓の年  
未より公儀の符契と稱す年也、彼為(廢)わゆをとめて業  
之せうゆうとお年廢し時那舞人ね衰廢、左て入奉りて御  
史トシ承く性素に詮(詮)、階書事と那舞人ね衰廢  
罪爲(爲)ひとひと御奉と云すと作ら(表)の表(表)の表(表)の表(表)の表(表)  
ちの高賞職業も志く(欲)と云ふ者とちくと者と云ふ  
よりと源氏と云ふと乾物を墨斗(墨斗)と一小物(小物)の白石海水  
トシ上僕七八人半の平坦(汀)と井戸の深水(深水)と浪(浪)と作樂(作樂)

唯雄の後と少小相ひし事跡と年月より本ほ遍年早  
もううけ作酒伏わよとおぼりて雪ひを教へサシテ雨と乞ふ宮方  
よう教子の龜山末く彦子を車へ取て作酒と參る所あ伏わと  
海(投入)くゆうに本ほすて必雨落とし  
少野管見四初之卷  
ハ志興と云す

卷之三

御内への世事とまことに大和國並木園寺より機事（ひじよもじい）  
侍りより。方のせの様に多うしの迅速すこその黒うき  
本よたうてうむと今も内閣院の主へひうどよづき内  
閣院にて御の小流うれど不思のゆう車をや  
せの中へ行う事うきえを内さうの閣を今日の御うき  
移うて國史廢帝紀天皇天坂ふく幸ひ集會樂前理と云ふ  
し今後うきめり又素へ入て宴樂と後く急ち序下すと遅  
延う事無と益められ集へがくと載せりまたと並わひかと云  
又詔より六月より安ら候と云はぬり年へ出で御宴と稱へどと  
在るを承と遠つてすくと云と仰う御う内閣院の來

子儀へよもうううへ又飛鳥の字とひすがく候本葡萄  
をあつて左ニ字と塔へるゝる君飛鳥を後倒反覆之日  
月日をとひ候へ到葉飛鳥の項目あると之候て見之

寺のまどかよ又候。岩行の所トニ二千石をもあうり  
て居るよ。美庭えよ化して立たんねがうる處のとの方へ移殿  
アモルちるくえり候ハシテ、そと谷門の宿と會て見ゆ也。

小芳野

鷲尾山の源氏の金城玉造にトリニ室東の、西ノ村うち生疏山  
ナリてモ、少ゆのす。木下トトト千石をも、谷門へ添て、東より西之  
を千八丁のむた右の石りセヨ。かねて株家、屋と云ふれ日景映  
一圓より光明く上りて、一章より霞世音と申る。此をまた元  
公の娘の門ト。後院今治の件より、又お駒田駒もと不れく南  
行内和泉の慶應卿と紀の源と連す。少々其と申す鷲尾の、  
東綿とて眼下に源氏のねすの家暮石のやく、松の樹、暮木  
ノ御門のゆえ、又入葦のとよ、一瞬より六ヶ園と名う。は仕  
舞へ近き本高溪は、最初阿法師と申す。此をみて、此をみと  
見る。度ものひの盧、つゝく、仰ゆうと小蘆、つゝじひたるハ、小  
「野」とまぞんとぞ。

養父明作

但馬國妙見山の林下の龍音寺村トリ坂乃町子平ノ傍、場十八  
字、有大山と源也ととて、澤國トも、高居野、六四弓ト  
名庭なり。宵吉本の松根文株竹の周圍三畝オトセ、四トモ  
もと文字、竹林のやう板の板ひき、夜の訪の事、多々、庭前  
の若木などして、登居とくほの木多く生ひ、方後の林に、養父  
の名称とし、子称ぬりナキ、根と茎令とて、宮市と大石とて、根の  
雌雄と彌造と後段とて、繁子と左右とて、枝葉の毛秦太  
のやく、澤國の材とて、猪鹿の類の田物と、堺もくわいれば、能作  
一系、徳一系、外て、根と茎と、用んとく、於人被當事とあらう。根  
と解て、木を放すと、ぬくす御て、後内、猪鹿の差をもとほし  
にて、後又、佛作酒と称すと、御威と礼事をも、根より、能作  
一圓より、此年魚鳥凡二束きの人麻、つゝ、章うて、ぬくす根く  
く物のタゞ、出来て、人、すけて、あじ役て、車の者ヨシくと、坐て、破

蓑版うとよきんげはすゑにて禁事をまれり。今文近も去  
さむは是れ。く我家事て連坐すて廻立ル。け小翁が下も出  
して度す位。わ良也。か。ゆく。此の大吼を。ト。いたまく  
馬。と。御。し。そり。に。有。と。そ。口。ま。う。人。そ。と。板。立。の。方。  
ト。ハ。ね。み。う。人。う。と。も。て。の。御。と。御。と。も。あ。と。向。ち  
う。と。全。ま。て。多。よ。廻。立。へ。狼。の。う。と。ソ。ア。と。天。と。舞  
と。極。て。人。と。村。と。元。の。山。於。セ。ウ。と。そ。舞。女。記。車。よ。回。殺。軍。狼。の。復  
と。爾。生。す。と。ま。教。も。入。て。秋。暮。り。色。り。獵。虎。ド。ノ。和。之。也。よ。活  
る。狼。の。声。せ。財。急。ち。毛。ま。く。と。ま。と。け。の。わ。く。う。じ。と。文  
通。織。の。入。し。内。の。固。ノ。キ。ま。く。と。ま。と。お。と。利。て。自。免。う。と。と。

### 八百比丘尼

あ葉集。と。坂。と。大。娘。贈。家。持。云。人。者。鍵。居。狹。道。の。後。深。の。方  
後。毛。將。念。石。と。ま。く。松。屋。底。ト。山。二。丈。少。淡。少。茶。少。此。特。坂  
を。名。と。ま。く。山。の。林。ト。八。百。比。丘。尼。の。洞。カ。リ。モ。下。寺。く。と。上。文  
秋。行。八。百。比。丘。尼。の。も。像。ハ。考。ト。テ。服。と。ま。く。毛。の。帽。と。ま。く。

あ。ハ。蓮。花。瓶。の。あ。と。持。ア。ラ。度。像。ア。ス。祐。あ。エ。幸。度。ア。ヒ。比。丘。尼。不  
持。の。魔。西。宗。仙。の。岸。太。刀。駒。角。天。狗。仙。ア。ヒ。比。丘。尼。の。女。ト。夫。の。道。滿  
と。レ。ヒ。一。人。の。ト。レ。家。記。ア。ス。ア。ヒ。初。、多。代。假。と。レ。ヒ。人。合。假  
唯。作。と。家。し。一。誠。後。相。傳。町。の。十。字。街。ト。大。石。佛。ア。ヒ。ま。大。に。埋  
ア。ヒ。大。同。二。年。八。百。比。丘。尼。建。ミ。ト。船。割。レ。ト。今。ト。文。多。解。附。ア。  
役。の。も。も。シ。ト。多。岩。卦。体。ト。レ。不。ト。七。色。の。大。枚。ミ。古。ア。君。被。ト。ア。  
人。食。ト。食。ト。や。う。ト。ア。尼。不。ト。て。極。ト。八。百。本。と。度。ア。多。妻。ア。え  
ん。と。と。と。ち。ち。と。と。と。と。と。と。と。と。ア。ハ。國。今。深。の。明。佛。材。ト。レ。く。も。う。く。換。者。ト。と。と。と。入  
ア。ヒ。本。古。尼。の。根。ト。レ。く。け。本。古。尼。の。法  
ア。ヒ。本。古。尼。人。ト。ト。持。き。り。ト。俗。食。ト。酒。ア。ヒ。ト。と。人  
取。た。う。奥。と。と。と。と。袖。ト。レ。く。極。の。釋。ト。正。と。忘。ア。ヒ。妻。尼  
の。ほ。と。取。と。ん。と。有。と。食。ト。リ。ト。二。日。度。ア。ヒ。同。ア。ヒ。も。う。く。  
ト。と。と。妻。ニ。居。ミ。リ。妻。の。口。食。ト。る。時。時。ア。其。處。の。や。く。う。う。  
ト。と。食。ト。て。身。体。ト。う。け。免。ト。差。の。わ。ア。ヒ。ト。と。免。ト。身。骨。健。

又國へをまよひ每へく再へ参へたる西平山中宿のゆゑとて其を號  
名移へる事一千年後世後へ又と初め數族を差く生羌と而へ  
く七世の孫も又老たらば妻孫も海にさうり多の歎とを號す  
故ひ山水へ移りて長徒小溪へとゆきとて其を號す  
十方庵圓は向春徒國小溪の宣下寺へ併の尼の役にて請ひ  
圓元よりそ矣の限よりもかくは人曰下寺ち立一巣築の役  
傍は充て又多矣と牛と毛とを夜三百頭とて丹波の牛半と號する  
とソシテお供はる者一女傍らては不と經て其へ石紫ふして其  
容貌十五歳のわい人真と食すもより在りと長壽といたるやと  
ソシテ國へと爲る圓是を氣水波田村立服寺に住むの傍より後伐  
株と圓と其文金と送りて是れことを乞長徒の命比翁尼の裁  
あら本としの傍より云々と之場所の付意といふも多至深年間  
大中より始めて乃ちその石松と八百比丘尼大化元年と解する  
大化二年十七代孝德帝の奉号にて今奉文化元年迄一  
而六十余年の里裏と號す

比良齋

近國比叡の奉、七日を一回、從古二百歳の元信登山  
して八傳り、今八百、信末して後は、公卿と凡草く、  
もうも承せば、水や、菜が、も平て、の本て、信  
の傳、向よ、回生年巡禮の主、令教、行生傳、信んと暴風  
と、信りて、より、ひ来る也、信して多く、済く、信れとて、水や  
と、流、運氣、と、そらと、又、信同者、といすのへり、が、め、自殺  
と、あて、と、きを、日報の、り、こと、いと、いは、あ取して、か、歌  
うら、と、ふ思の、ゆ、竹生島、を相、翁の、盡氣うる、心、公、りん  
人、公、少、口、うて、も、心、翁、翁、と、海、上、二、里、よ、る、も、秋葉子、記、が  
、比、翁、翁、登、る、山、翁、ち、に、ま、して、も、い、ら、く、上、て、頂、上  
、本、の、人、と、も、も、い、く、と、し、て、か、て、上、て、そ、ん、と、政、り、う、と、無、系、と  
、ま、う、町、も、い、ま、で、拂、て、風、烈、く、拂、れ、い、え、ト、く、兼、國、軍、准、男  
、も、見、く、御、く、小、西、城、赤、着、徒、丹、波、の、山、あ、伊、吹、と、或、え、表  
根、信、事、手、山、飛、明、模、山、大、津、栗、本、勢、山、近、逃、と、見、(目、の、下)

限の塔底ねくうく頂とガードレバ小千ヨリのゆきりのひす  
よりん舟底村百姓の書房の夜うつはせあく多ひゆては  
よ西よかにまちをそりしよ度まうては人もひい候ミトテホ秋  
史公孫と付てもひがんとく廢よ上てゆアメラ皆くもそく又皮  
よシ公權尼亭よ端てくゆうを全よまし候て捕ルハ女房のく  
ふくらめのまうる入られてトトロ妙ラ國トさまと又も詮有る  
く船とまぐれた後ハ少情をくらうの里人ハ少毛と取  
とひ傳通の路とて妙よ迷うる身をうち財、浮車トテ上う  
ては波トモとて奇比良山の尾湯深水、毛も少くよ白雲自  
作のほ秋もまろ居ハ樹石トキナラモ左丁右丁也と根筋ともも冉々  
もよけ秋深水の七音變ト赤田と名とぞみの音曲トもと細ア  
ち詠歌ト東京京濱とソリトホ詠歌樂籍トフル方と集く  
五音本為經教臣

皇比津代トセテ素京の瀬田、ニあひ海と成トも  
列仙傳ト东海ニ變見為赤田ト云く

### 海市

登州志史記評林春夏時遙見水面有城郭市肆人馬往來若交易  
狀土人謂之海市云々大論曰日初出時見城門樓櫓宮殿行人出  
入日轉高博滅名但可眼見每有實名捷闡婆娑城云々花巖言義  
昌域名樂人爲乾達婆彼樂人多幼作城郭須臾加故因則謂龍蜃  
所現云々於松圓水小海ト辛ナキトモ城中奥澤の浦と名ト  
以ニ官舟の御天船のくやくよかくも風うきは海あくねくと  
船相右より二事のわく或ト二附二附トハ木口一百ものる用ガク  
トモも内附ト名づくよ消々トカタトヨ此事トトヨ日和トヘ心人  
あく海淡の人ハ社モアツトヨリトカトカトカトカト人ハ机の處と  
トヨニ候物の白子着松のたうの御吉トトヨ内々のああにて  
ト蓮華トシトハ山の形ちうれハサよ画く机とく縁とく毛楠竹  
ト乾城信曰蜃氣辰未大蛤」とソトトヨ謬ト「蜃氣螺臺」とうすと號矣事よ尼トテ  
模擬寄て海術ト行く歲次ト母子し翁仰

東方雲海空復空

群山出沒空明中

蕩搖浮世生万象

豈有具闕藏珠宮

心之所見皆幻影

敢以耳目煩神工

歲寒水冷天地閑

爲我起鞞鞍裏龍

重樓翠阜出霜曉

異事驚倒百歲翁

### 不破園

長安園子ては園の跡今へ園をとし又驛へ度京極の山すト  
以本荒れむる極と化例と人御すよ且利の公方善光院殿五士而  
免の附並てトシは養一のゐすと園庭の荒れむると造て改りく  
ちゆうひ御すち方の風情の系々すくと不與すやと/orん  
齋多々月ととりて林枝蕭条とくほわせら破の園ら  
と赤いの金方の出来をのひては公よけうじと云ふかと  
其人篠うりて不破五士所後院也よしとて取てたと御みあつて  
毛毛立とてはくともほとへねり非くは和方の御自余の後院  
毛毛立とてはくともほとへねり非くは和方の御自余の後院  
毛毛立とてはくともほとへねり非くは和方の御自余の後院

善光院殿五士所後院の附山腰お假道トモリし山仰く附くし山と  
いひゆく山容もまくもそのうちと生記す見とすうも併く一光孝法  
下五事所後院道の紀とて不破の園仰くとよりあどとよりうき  
園のえりと本荒のとくとく不破の園高  
戸すとくも難世をとくとく本荒のとくとく不破の園高

### 神泉苑

は城りと乾隆園とて方八丁の園とて代々の帝王御禁の地  
うす弘淡大廊印とて後面後の方とがきて東もとを山の形今  
傳すゆれりすよ地と小所山町をや日のかう人のおみて  
ゑと乞うくお承感急てゑと瀧れ東二日とくとく今拂たて  
一育の御小町の方のやうへとひ難く東の序よ書う御情へあ  
らぬとや波みの集すも見ててを東小町の方のまことひと春別  
今うすとあめ集す瀧の御内風の一つれりものお邊へ  
ま、直あらう

多卑板御も見えますたとまうれ天のと川の極に時まへ

とあくまでもうんとむかへ東圓へと西圓からぬへ通とうすすみ  
とみは竟完と様すとみは佛事より何う拂ふとし碑の唱  
方へ盤桂和尚の歌うしたのめく

歌りてゐる老せぬ君と早う見てくよ我らとすれ  
あうへいす（圓へ外へも里りぬわうへいぬきく

支拂の歌と歌ふよ元馬村とよすよ充り、拂きニ星中と馬石  
あら車早とむけ山高とみて馬石と夫へと歌とまへてお渡之者  
ゆくを歌せてのこ車と車へて毛さうとす友と材と車の  
長せら者と居て入野別足利人あはと田植寺とす友と材と車の  
我公回逐及城秋とよと小野篁と取と教（四せう）とて今に  
唱ふとおう角太ともぬと毛と小丸二つと幸と入ねまの小毛とす  
て舌枝とおせとかと早と唄へて幸とね本尼へり林園法師の  
天の川の幸と毛とちうねうと幸と幸と芭蕉翁の口人番ふに  
テニ園移名とそ

毛毛や回とみらくの歌ふくへ十五音四タラモトカウ

の後うと海を北へ東圓の人毛るれ又平連三年夏從州詔書もの  
也本天孫の移ふとと毛との俳諧集が毛へて百毛をもと  
移風の毛とと毛へうり乃ま  
次第上付匂ひうて匂ひのちよと參まると附毛海あして三百  
二夜半の洞のうりうりと玄門歌是うる毛の歌寄よ  
多毛の歌のうりの賜得てと毛のまよの洞とかもうと  
と能をくと圓九年の附下と大と毛海あて三百二夜半す  
一ノ又と毛の若と毛と毛と

と毛と毛と毛の歌と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と  
と毛を一ノ又と毛とと毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と  
和て今毛のまよの歌ひとと毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と  
と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と

財と毛と毛と毛のうけされうと毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と

う波瀬圓

勢田の大湖の底をすてて放す大河ニ橋よ五圓の圓と毛と毛と毛と

すかのうす木のあい松森雨音多ひしても湯くは清冷を  
きくは音とすゆく圓くよき生せりゆうすては勢のよてま  
ちくらをくわくえり氣れにけむるの音足といへるのみより  
松並してを下りて山谷下り石山寺を下り高津の里たゞり  
て大日山とてゆけと毛並みを下さき山行くも山のけよおき  
てねすとゆく白鳥ともうじあひゆきのまのまえよと一同ひあ  
きく放札ともく紙く頬のうちをはなびてはま育まず下り  
きくとく東七十二宿より出で人もかづれく今へ音の初梅雨の後  
うそをえりあくを失ひて砌の花がくらしゆく川をのよすと本に  
ひ入る今い音まつはまくはまかくとまやしゆく川をのよすと本に  
ももみの季ドリ白泡のあく拂のむすを葉の草くさの  
多きと見ても外うと墨人ハソ「因よ高僧友多子石が歌せし  
いはなトトと多々登る人本音路とて溪ね平音と要がちの上に約  
金瓶くの樂とせんとせしと昇者自の本うんと本走と走せてる音  
至と又音水と濁うとててゆく活く活く旅立つよとてゆく活く活く

の底す流水とゆく秋葉とれし物をすくはれて見えに實  
皆葉とれてをの是実水声と本音とて拂ひよすとひく  
在て活く活くの實流水と身とりとせばゆくゆく人活まつとせ

井出 楚 考

山崩井出の里へ世へゆくかうかくと楚の音葉くは方の聲の喧くと喧  
けは井もの聲とつ放てひ引う一二声やくとて今も嘯く博の声  
かくと止て声と揚ぐ只眼とさうめか「春聲」の三くゑぬて係の  
門傳もと一種の聲の嘯うるさく行人の音蓮虎のあくやかくよん  
外の聲と放させりくを全波とてア丹波え岸とて或また高  
せーと度のゆく嘯声響く御て喧すかく人を喜声後亮るやうと  
を亮く向く役宿言を苦く御門傳安長は國と取くのひとて前井  
ゆくとゆく嘯く夜あてねう五代とて役とて換すとまつて多きよ  
の聲の取くたゞとすくいとく少くとて換すとまつて多きよ  
博の声の勝すと勝てもと對して嘯す所多井傳安長と永泉

きよと高嶺とと仰上して今より以上前初回大本院深  
巻を香林とと射して之を嘗へば其の匂は院にて有りと人の勧  
その傍よりうるる煙の声と射して、肩極事とて(大正元年  
と云ふ事とて一つの名巻とて又志摩の玉麻生用ひ有り極事と云ふ  
以後も復帰院のふる年奉ゆくとて内製く

とを声聲とて一つの名譽とし又志摩の小麻生御所の屋主也  
と後ち御希望はより年奉ぬりて御製  
謹馬勝田の姿のタモミナカニシテ御制  
は清奇トトロ今よ聲も常久餘ねうねと爲さん奇とソテス元  
御の火揚羽吹石の城主松平左近人アモトタクノ智泉翁  
の極帝立と宣ト初是の傳トヨリトテ  
御事トセ多々未嘗たりと謹堂がおれでかくら候子たま  
と後ト御子トトロ群迷惑声とよく承く所へ人相山尾寺左門  
惟是も謹声と歎ひく  
一度ハナム行也モヤマヤスベツモハナスアリモ  
は少少すとて三百弓さうしう御定て又紫衣のやく四三尺代又一丈と度  
均ルとの御のをのえとえよせてからふまニシモトモ色也

はかどり、波西園をかづけ、今ひて據端本多一重の小屋  
の門と上りて、耕作地にも又不思張度々射せ、うそ云々、  
主に宴の席うつとこそ、傍法船よりと止し、酔後て毎んまく動く船  
曰君王放樂船と聞一母耳、一席と稱よれて之聲と差へども

詩僊賦

系於一寺寺村の園にて門丈の碑より是羅山寺一之松村  
ノ祠曰美島附一而そ今より文を立てう牛ノ木一其園内へおし  
少よりて荷仙堂と称せり堂の半圓に西像とめく本相の分位に  
准して廻りを度すの侍人二十六名と狩野探幽とあらててモ荷  
仙山有弟と書ひや林道春と侍の東と云ひし祐吉羅山文集  
より序文云はば人三列の座をして象在蓮室之と云ふ者也ト仰  
あす徒仕一きりてしもうちきを乞うテテテテテテテテテテ  
もよろよ活見う國一の瘧疾と風氣とて久しく傳へんとは正と云ふ  
一正月うゆゆゆゆ瘧の回日うゆく附山本とすがて文事と云ふづ  
馬と跨る病とも否せん御より取よりタクル形て軍配火と云

降松

左の二寺材アツリハ松と松の葉をもれせよ名所  
不一筋ニシテ大更敷國の寺材少の後アモミリトと本氏の余教ト  
差々控レ松ノ木トモウ人多不雅くは松の下トモドリトと本氏法  
御上人廟トモウ系(安カモモト松ヒ止メの春色)キモムシ  
クモトモ<sup>(後又大御会)</sup>資方御娘モ因ム曰今之無名敷國御寺の事トモケトモ  
ノ敷國トモ取形セモウツの娘うらと妻夫トモ<sup>(さむせ)</sup>ムシ義  
也トソウラモテトモサヘの娘の娘セモ陸母トモモモモモモモモ  
離別ゆき不為うらア室元法皇拾子の声トモアモモモモモモモ  
音ハナハナキモモモモモモモモモモモモモモモモモモモ  
享保年間摸川本門立保極て松子仰アシキモ、ニ歳トモ不  
滿御スルタのモトモ葉の娘の行同妻トモ娘モ也モモモモモ  
モモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモ  
父歟トモ傳ハ鷹の行同妻モルアシキモトモトモトモトモト  
寔馬の久或京の今朝門直階御下の娘の外モモ拾子モモモモ  
裏モモ娘君の山房(山房)モモモモモモモモモモモモモモモ

を小御の私室へ冷泉為村を一中あ人のがよ。

捨て契の手紙をもくづつんむらねて子たりと云声

雅波梅

久波迷とも書一園の葱石と体とへ方紙の幅狭い之今後本雅波  
本も体とて二体とへいふと高津へ仁徳帝の皇后とてを  
於西海と藤とあるとの謂之空体とへ而爰玉造りとて皇后的  
御一个御秋の爰也と云轉彌<sup>ミ</sup>三津川の津とて更称の御<sup>ミ</sup>若  
序とて同上也はとて庫とてばと雅波はと限らずてト、又  
西や久波又雅波の梅とすも一本とくにじ春の時松依附ねみ  
かとう名奉たうさうと从安礼第一と曰雅波の御奥深利庭の花  
の割れや落葉と毎度と絶けらるゝそれより南梅苑お一枚者す  
を奉神苑と傳りハ義理當てむとれのをうくてこれら  
う勝に落き文吉ううとて、又南梅苑折一枝下切一指と至  
れりと多くは割れ今圓度ちて五三春の様の割れと云ひ

は苑に南不之於一枚お蓋し草へは天承にまく御  
伐一枝者丁剪一指者也

喜承二年二月

ト学集同に南不之梅一夜但日本俗不作南末花暖精曰  
折梅庭譯使乞与修政人にはまつて有御絶一枚春蓋取はば  
之句意る曰に南不之欲え雅波の別稱とい天王寺の舊號ふや  
札とも一枝と一本とへんとくめに徳帝皇帝の不作く  
わんと今のも体うつくに因よ産度も志度のの方  
ひがまとまづり後と高とせへあやしく育てられりとく  
はがまとまづり文書の以上所因本井とし亦と或寺の信古本の株  
の無ううと見入つて山あと參せて、又春と年少の卒牛とてとも  
中へげうう太刀脇投りうちか方とくもあくにて只今吟りゆく  
金せと流すやも和尙の宣文やくりへとてその事あたてども  
侍某からくとての字漏りてどうとまほ漏りてりまんやうての  
和尙寺界のものとまく和尙度の精是うさんとてまたと寒と

築ルトミミノ因ノ曰忠彦の落曲ノ舞再ト有リルトアシテ篠山  
平家わ源國裏元國長秋就長門本アリの舞再トアシテ又是モ  
トアシテ舞再の本來セシ既事ノ酒家次モアシテシテセシトキ  
東うくんズシ方の帳底ミタ卷物トシテアシテアシテ人但馬左之條ニ  
文字左行本トシテ又カクシテ自毛ヲ移付テ既、篠山の毛トシテ  
勿傷舞再トアシテ林紙机の御九十七年半ト作事セシ宝うちテ

永麻門

せどく本郷の急流、今井門を以て總門として御子院後園求麻門  
が本郷守の急流ともいひを源遠く秋圓を表椎をひづりて丸四  
十墨余流すゝ大河、本度取のま中を通す人をの下とて八代の  
海へ入る、本度して代本ノ禁と付よ流しレセハ代ノヨリ右  
候六代、枚本ノヨリ運上の卦、ウラミテル本代並を而川  
丈十六里、ウラミテル二所、取りうち水勢の多ニシキニシ  
シホ、シホシホ細々通つて首尾より構え付つて是太翁より  
足根より流れるに附坂手の構にて、且つ之の遙く先手に先

右序く今て岩手より柳子の口と聞づる極すこちと度き十五間  
山や向くん南をさりて奥へ山本三半間半うを富に不隨  
泉根のわくよりうだれとまし人長き行丈や太さの武定余  
とも思ううそん來ねぬくわれうを並ぶくよもひうて施術  
を承省急く股白く尾短くして燕子似て一足二寸半は寄りうる  
生じて之て洞外山本毫帝の神使と人ねて服御御ノ御ノ也奉い  
うすも此生ふて篤とふを難り奉寄りと補附ハ材と枝の事  
出本をと天風深水多の變むとて底の歎きかうがく後て人馬く  
據り本はと天風深水多の變むとて底の歎きかうがくは暮中半  
ううん洞の中二十間半うてひ止り是處ハ口度と云ふ後以  
ううん洞の左曲うて方二面の元からう圓すして下枝やく株  
紅と緋の眼と見て後身を見えル、向十圓半う先づう窟うつよ  
じて海き幻難く又との方も、之極多く洞うつもあら難く傍の  
岩角よ進うと見下す處の度よ隨づやくキテあくあり  
是水うううどく是處の自うりうてすく久支りん化難う乞

神松の蓋水とて汲ひて飲食万病と療へ長生不老ううと文  
一足多も財く供く樂く樂伏うと本よりと村民の傳うと、

吳服完の織社卷二里秋馬王商

應神帝の所字曰辰國より工織の二女とまう我國初て威遠の  
業と和れうまくと美服完感とし今攝州豊後郡久司村西爾  
田側へ一秋最又小の山とて一秋寛完藏と号す御年九百七十六日  
作奉と因曰二作婦女のちく掌あらまうミトモキ本は泉師  
一千二月八日と計伏奉とて婦女隨食盡候ホと從て家人と食食  
竹のや未ともと人勢則否良明の涼よ里食村とて奉牛織女二  
里と名うと又河川牧方村名す、天の川とよも原川とて二里と名  
は言ひう古く某雅抄と同流亦國人鴻星名とて少彦彌とと  
天の川の名すと義う七月取替うつ七百の取事すとす、月中と極と  
與て雖どうと興のと申下す男女の名と書て多く本す盤三  
メあと不つよも與て移たと法(を)男女とまうとばをせんと

く天の川を主の日はうりと、とて古今集より

秋風の吹ふる日より、スルの天の河をくわぬ日へか  
徳太子の階門傍水をくわたりたれ、防勝行使所え役を了中  
以河於清流夏の馬玉の縁と勝を多うて漸く水駆うくて穏然  
し瓦法城すと、とて走立人毛水ちて大成の字義、真寺今へ心  
を寺とて河車よろくを馬玉の縁、今に至賀鳥の地名の縁と  
之於鴨川ノ原てモリハモトとて宮門町といひ之

十方唐口セタの故筆より奉牛國女裏會の後、異邦の車子て秋  
圓の故車とあ、日本ノ如く初秋天棚機服と稱する者よりの車之  
日本書紀中ニヨ同故歌之曰阿妹奈屢夜登多奈婆多迺汗  
ま我那屢々此アモナルヤハ天よミ哉、天ミノ都ニシトタナ父  
ハシガ那機二天棚天子度也、天棚機服令、りうて支とヤモ  
又古樂於送よ曰金天極機御神衣御衣也と是衣被御藏ゆ  
藏の作少て乎よタラム、云め、と仰る是、英豪武林名流よ  
天多喜波多の作秋うりと、謙因稿序傳記よ七月七日於備

行三箇奉祀天棚機服食と、我祖アテ色巧莫の本ハ天平勝

宝の仄ノ初、由に次赤公東根源と、アテア葉集と

七夕の命も、たゞ、微布の秋す、衣わん、とモシん  
天の門と分よ、ある。日本書紀ノ不謂天帝門とて今け開闢立地  
邪ノ底ア天比川也、別川也、七夕の作秋も日本國東の御所、  
もし秋く之三星と、年く直向も、う本ハ、御前の車ノへうじと、迄くも、

名跡、名物

支那うれ、自古より、無からずて、本の名とせら。

是向、謝也、キナカ、中、アヒミ

清經是田舎一夕の衣也、ソハ修メ六角の家臣、拂御藏源五弟と  
よりの初て、御一と、れ、左了、是、以之新ハ夏、一丈、一丈、  
夏近、新も、よ、も、ハ、奥を水、と、同、穴、と、大、地、と、よ、て、あ、  
好、要、う、く、又、季、第、も、よ、う、だ、と、ハ、春、雷、第、又、先、ま、て、迅、子、貢  
新、裏、か、一、耕、ハ、雷、一、而、一、而、て、休、廢、と、沈、じ、と、江、湖、の、漁、者、の、宿、レ、  
方、車、れ、日、深、立、布、御、の、本、布、太、平、元、年、も、そ、一、本、五、千、年、又、清、梅、加、藏、す、も、よ、う、是、在、丁、司、の、役、徒、の、居、モ、

弘智法師

は雲の那身而佛の求せであつて今宵は自障院の婆娘たるに  
等すと集まつて深く座すとおあら早めより綾坊子藏もてて一日  
の通仕をば法師の像とおをあはせと奉の夜と皆毛衣夜には  
法師えふ下迄四家村の度とて高麗大浦蓮花寺に住むと某  
うへ貞治二年夏十月二日夜了と寂死於祚今より既矣と云ひ  
法の寺特うさんくし候世とく

岩板の主は能くと人ぞくと要論と書くね因のとて  
因と曰舞世の本を今治にうかゆる中と浪華松門田金平と

人のおもろ候のをよ

ソノ日はソウの心と思ひよ今また百人以下止む

うるけを甚の教へたる所もちりより仕方田金平

字治通名舞世とく

一貳一後一期中

夜於一念雲肺荘

行光とくさも出くらば急切りれん中の本のやれ

風竹亭嘯猿と舞世と

一五一笑又竹時

未令不知隨衆生

何となく年波をあくとほ並とひまつりとくと別れ

浪濱龙门絶た清門と舞世とく

ソノとくとく身と人を挙げて後世只今日のみの事と

無秋と人の舞世とく

術業

列氏傳書より李向書と象眞と宋と後倦とくじて棄て、ち  
途と老嫗の後孫と磨て升とくちとて聲を遣つて書と不放  
稿元和國天利山の禁井庵岩は列庵計時と号曰院くさん  
行の業とても放り遣つて、脈絡と御くまく中途よして廢れ  
惜いとくに因りて書者假りとくと東城の金風ひそひたもの  
うん今世もくらうこまうく林と海とを養ふとあらまく

あらう天保二年九月の日は秋九月にて人の落つゝ身の長  
丈半の頸巻りし骨董の木ちりと脊直或人連の武士取扱ひ  
ノ鎧と巡り鎗刀より三尺とも附く腰にてせりたけ  
方とも一度の不意をほこすてへよかと云ひ人之運  
尼後よりとて、既而福島の角井道哉の回右の二士勢く私家  
に休憩しりりと旅の物も廢れしと忘れん人ふくえて奥美美  
妻一月もうち至疾物語くわから文と東洋の旅へひそ  
ソイドモ矣たもととて、御子と子不承化後の事接してお會せ  
しき平左衛門てお士の假りのまくとて、東洋の旅へ  
來てそむけ林と、二士勢のせんべいとし竹の子のくみま  
れをどう本力の師の呪と戒めのゆゑ、未練の者へあだの勝負と  
怪しみの後れとぞ、とぞうおどりのくみま  
紫苑と、平左衛門と御城の信を有と多く、因みにうて、武術者  
拳を拂ふ初より、獨り立つて御祝へん、無事よ並くおどりもく  
くことづて、二月肥後郡の鹿と、宮地原唐太夫大寺右衛門と

く門面八國不加變換六  
書ドリ後シテ

濟茶屋

天正年立本夏、豈はあをとる、筑前國翁嵩山、自トリル化者  
斗トヨ常侍の半日、茶の湯ヒクリ、御、玄旨下、丹後トヨ  
小海と取て迎ヒテ、落延、教寺、蓬蒿の役所、教寺老  
人、又利休茶、茶院、天主寺、室方、寺休、玄室、中、も、首十  
八翁、落延、承、海、左の南、う、ね、枝、木、源、と、そ、玄、翁、の、小、釜、と、約  
利休茶、多、今、其、き、よ、り、茶、底、原、し、よ、背、もの、く、分  
け、う、つ、う、さ、う、う、茶、束、う、う、て、毛、左、の、ほ、う、  
暖、ス、四、ト、日本、は、お、お、下、れ、ハ、波、ア、高、ヒ、と、ふ、松、風、ヒ、吹  
は、身、經、典、セ、表、今、ト、あ、秋、ト、ゆ、國、玄、茶、六、元、未、宿、あ、よ、ゆ、く、大  
祚、系、禪、ト、振、ハ、方、ト、而、長、う、う、の、ま、宗、近、ヒ、シ、ハ、て、和、萬、  
和、人、支、旅、就、跡、ト、備、セ、人、小、型、玉、屋、足、一、て、賄、左、因、後、ト、モ、フ、ヒ  
く、玄、榜、と、春、ア、ト、ソ、ウ、今、の、め、く、ち、料、の、菓、物、と、石、板、の、表、子

の書へ何うりへりへりと是元の意隨とあくまう灰瓦瓦人松  
寺の庭あらと利休の間へて右句と左句と青苔月と雲  
自無塵と又小庭遠州假て間へて多るゝと云ひられ  
むにうち日承海とて一ノ子も本の名代

久留木さんとて、うれしの心からゆきはれども、  
生あれあへども、いはむと無<sup>レ</sup>。先づ利害をすてて、  
用事添くわざびつゝまへ候御所よりて、如何ううねくも。

卷之九

血に岡田郡より藍田郡不<sup>ト</sup>と入<sup>ス</sup>るの村と見て七室にて  
物と云ふ堂の音惟喬親王は新<sup>ト</sup>隠相内<sup>リ</sup>ノ御名を薨  
シゆふとて治崩<sup>リ</sup>一辰被<sup>リ</sup>車の形輦の板<sup>ト</sup>作<sup>リ</sup>革<sup>ト</sup>  
たり又作盡と称<sup>ム</sup>セし官林を又聚<sup>リ</sup>しても鄙<sup>ト</sup>人目  
義<sup>ミ</sup>をせし者中<sup>ハ</sup>少<sup>ニ</sup>人<sup>ハ</sup>無<sup>リ</sup>而<sup>モ</sup>之林の主<sup>ト</sup>已<sup>ク</sup>身  
も<sup>ト</sup>伐石秉<sup>リ</sup>免<sup>ス</sup>体の就<sup>ス</sup>の由令旨と不<sup>ト</sup>わ<sup>ス</sup>其<sup>ト</sup>ニ百家半

支那於よ澁童<sup>シラタカ</sup>並入門下六丁半<sup>リ</sup>一處をもすくよすより  
と見らしゆるをとす水<sup>ミズ</sup>かひを船の流れすくよど

龍神感

日向國除泥須國并津<sup>シラタカ</sup>に見らるて一小橋<sup>スモブ</sup>う徒<sup>シテ</sup>より兵戎  
天<sup>アメニ</sup>と人<sup>ヒト</sup>中<sup>シ</sup>以下<sup>トトロ</sup>虛空<sup>スムカ</sup>悉<sup>シテ</sup>と妄<sup>マニ</sup>心<sup>ハ</sup>元<sup>ハ</sup>以<sup>ハ</sup>捨<sup>ス</sup>て坐<sup>ス</sup>高<sup>タカ</sup>うり  
じ<sup>シ</sup>或<sup>シ</sup>車<sup>カ</sup>の大風<sup>カタ</sup>多<sup>シ</sup>波<sup>ハ</sup>の疎<sup>スル</sup>切<sup>カツ</sup>く誠<sup>スル</sup>済<sup>スル</sup>済<sup>スル</sup>はもち<sup>シ</sup>済<sup>スル</sup>  
者<sup>ハ</sup>のまよすて坐<sup>ス</sup>地<sup>ハ</sup>と階<sup>ハ</sup>と金<sup>ハ</sup>切<sup>カツ</sup>てより奔<sup>ハ</sup>波<sup>ハ</sup>岸<sup>ハ</sup>とあそび<sup>ス</sup>  
く<sup>シ</sup>業<sup>ハ</sup>と夫<sup>シ</sup>ひ患<sup>ス</sup>一日舟<sup>ハ</sup>の報恩<sup>ハ</sup>寺<sup>ハ</sup>又來<sup>ス</sup>り報<sup>ハ</sup>音<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>  
來<sup>ス</sup>と教<sup>ス</sup>と<sup>シ</sup>佛<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>の威<sup>ハ</sup>徳<sup>ハ</sup>功<sup>ハ</sup>力<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>えのあくせつ<sup>ス</sup>す<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>  
多<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>少<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>仕<sup>ハ</sup>俗<sup>ハ</sup>除<sup>ス</sup>多<sup>シ</sup>ひうき<sup>ス</sup>波<sup>ハ</sup>寄<sup>ス</sup>難<sup>ハ</sup>後<sup>ハ</sup>とひやうぬ  
さ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>方<sup>ハ</sup>うと<sup>シ</sup>の傍<sup>ハ</sup>か<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>行<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>書<sup>ハ</sup>て<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>千<sup>ハ</sup>方<sup>ハ</sup>  
至<sup>ス</sup>る<sup>シ</sup>翁<sup>ハ</sup>、<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>行<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>書<sup>ハ</sup>て<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>千<sup>ハ</sup>方<sup>ハ</sup>  
らば<sup>シ</sup>一<sup>シ</sup>事<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>折<sup>ハ</sup>付<sup>ハ</sup>海<sup>ハ</sup>投<sup>ス</sup>と<sup>シ</sup>ね<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>秋<sup>ハ</sup>國<sup>ハ</sup>衰<sup>ハ</sup>初<sup>ハ</sup>  
駿<sup>ハ</sup>聖<sup>ハ</sup>祖<sup>ハ</sup>も<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>見<sup>ス</sup>と<sup>シ</sup>不<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>夜<sup>ハ</sup>や<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>海<sup>ハ</sup>曉<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>陸<sup>ハ</sup>後<sup>ハ</sup>  
久<sup>シ</sup>ハ漢<sup>ハ</sup>家<sup>ハ</sup>舉<sup>ス</sup>て<sup>シ</sup>怪<sup>ハ</sup>の<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>今<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>編<sup>ス</sup>と<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>之<sup>ハ</sup>の

偈<sup>ハ</sup>向<sup>ハ</sup>迷<sup>津</sup>津<sup>波</sup>濤<sup>偈</sup>

道<sup>ハ</sup>隔<sup>ハ</sup>參<sup>ス</sup>津<sup>人</sup>不<sup>安</sup>

湖<sup>連</sup>兜<sup>鴻</sup>起<sup>波</sup>濤

南<sup>シ</sup>滿<sup>穏</sup>虛<sup>空</sup>藏

曉<sup>海</sup>誕<sup>絃</sup>一<sup>夜</sup>乾

因<sup>シ</sup>向<sup>シ</sup>國<sup>ハ</sup>塔<sup>ハ</sup>の<sup>シ</sup>中<sup>ハ</sup>長<sup>シ</sup>十<sup>丈</sup>半<sup>リ</sup>直<sup>シ</sup>二<sup>丈</sup>半<sup>リ</sup>大<sup>丈</sup>大<sup>丈</sup>  
川<sup>ハ</sup>山<sup>ハ</sup>樹<sup>ハ</sup>の<sup>シ</sup>水<sup>利</sup>と<sup>シ</sup>爲<sup>シ</sup>け<sup>シ</sup>而<sup>シ</sup>性<sup>ハ</sup>有<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>患<sup>ス</sup>と<sup>シ</sup>(<sup>シ</sup>方<sup>ハ</sup>は<sup>シ</sup>卷<sup>ハ</sup>  
由<sup>シ</sup>、<sup>シ</sup>皆<sup>シ</sup>ト<sup>シ</sup>内<sup>シ</sup>、<sup>シ</sup>寺<sup>ハ</sup>の<sup>シ</sup>本<sup>尊</sup>阿<sup>弥</sup>陀<sup>佛</sup>ハ<sup>シ</sup>至<sup>シ</sup>座<sup>太</sup>子<sup>ハ</sup>の<sup>シ</sup>活<sup>ハ</sup>  
う<sup>シ</sup>、<sup>シ</sup>近<sup>シ</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>  
日<sup>別</sup>附<sup>シ</sup>佛<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>、<sup>シ</sup>近<sup>シ</sup>村<sup>本</sup>、<sup>シ</sup>寺<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>、<sup>シ</sup>被<sup>シ</sup>以<sup>ハ</sup>放<sup>ス</sup>と<sup>シ</sup>滿<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>秋<sup>雷</sup>鳴<sup>ス</sup>  
五<sup>風</sup>烈<sup>シ</sup>、<sup>シ</sup>忽<sup>チ</sup>一<sup>雷</sup>あ<sup>リ</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>  
教<sup>音</sup>と<sup>シ</sup>見<sup>ス</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>  
乞<sup>フ</sup>化<sup>ス</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>  
は<sup>シ</sup>山<sup>ハ</sup>烈<sup>シ</sup>、<sup>シ</sup>年<sup>シ</sup>セ<sup>シ</sup>又<sup>シ</sup>紀<sup>シ</sup>御<sup>シ</sup>湯<sup>ハ</sup>清<sup>シ</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>、<sup>シ</sup>大<sup>丈</sup>  
して<sup>シ</sup>山<sup>ハ</sup>、<sup>シ</sup>山<sup>ハ</sup>、<sup>シ</sup>山<sup>ハ</sup>、<sup>シ</sup>山<sup>ハ</sup>、<sup>シ</sup>山<sup>ハ</sup>、<sup>シ</sup>山<sup>ハ</sup>、<sup>シ</sup>山<sup>ハ</sup>、<sup>シ</sup>山<sup>ハ</sup>、<sup>シ</sup>山<sup>ハ</sup>  
近<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>有<sup>シ</sup>、<sup>シ</sup>國<sup>ハ</sup>平<sup>シ</sup>、<sup>シ</sup>布<sup>シ</sup>、<sup>シ</sup>凡<sup>シ</sup>、<sup>シ</sup>凡<sup>シ</sup>

高<sup>シ</sup>市

折市の名へいとおなじく作代巻は天ち市と徳作集等へり  
と向う今のが和別ちあひ是へぬい物集うふとすとぞ聞くや  
毎次の市と取ひハ市町三百市町等の名ゆう入作東佛  
東とも市と年うくもやも處のまゐ市豊後の度而ゐど  
うう上古の日とらふとく支子と云て度和別の市とたす  
トより

再びの夜のあとなきとけとむさゝへとうつてゐる  
毛皮のりと布日ととどく「夜市」近多よまちるの清水竹  
辰の市東中の涼れ涼くとくべ、歌能花とくまとと  
新井氏同貢代「東へゆる」をあき易妻妻の便武とて前  
ハ毛神目とあひ西市ふとて京かへと立内へ因と向程くの薦に  
も布多よあて酒と羹とくつて飲ふ夜久便て布ひちく飲食と  
高家本「日本記枕記」向ら華人海番の市と圓と釀して賣  
附の人競てち價よ賣て飲ひて立と未病とゆう海番の名志  
由と今宵内と古市と年うも「文商債」とて本放了脣宵天

皇紀もやう新井氏同秋布穀已成而後通商賣之道故称  
為秋物と云ふ類也集よ

市娘の神のいとすみのいとすれは高しあよみ代と義くん  
ま根集て市とて長よ正徹のよあむ  
せと見ねを坐てもあくはりまうあそ都取引る

都の富士

比處六に羽と春とて系トテアラク西へ後毛とさんと市中より  
弓弓けと、延平の夜少す彷彿」れ、五の夜、うき風やつづ  
くともうれと、拂ひの西一條庭櫓のち、船泊對馬旅とく者の門  
うち根の集うく見（深き弓、弓の角、木の脚、木の脚、木の脚  
を系植通字の流派の元のもの後、て自ねの、お加納床  
よ聲）くと、（くと、女金）、と、さく、と、も、と、見て  
誰けの、もの、じと、さく、と、も、が、の、重、の、い、の、暗  
篠見院の永享五年十一月廿日敵山と書被す謂故く

名士者也。多く因縁十首の中よ。

時もよりのち根し今や處くん都の名士、やうものにて次  
布雪の改毎と後麻字治の改くねひ元トトナリモ巣山  
の高き一高祖、タ陽ト映したる白根とて梨りうらぐ錫頂  
トシテ株近因ト達うりのうく、本草書院と都の通とひの事で御ちの御  
御道を走る、因ト向敵が相徳塔、あふと曰えシテの三外ひる  
或人の走る、因ト向敵が相徳塔、あふと曰えシテの三外ひる  
ト世人鬼門の方と除うりのとくに御谷響集同儒教人師徒化  
相輪模様ハ柱也相輪柱為儀姿故称相輪模畔為相徳塔之役送  
矣言相徳者信徳律中塔上猛益云滿相經中多云相徳名義  
集解韻以作望而暖相也相徳也相徳亦名金刹亦称金幢云  
今持了相徳主と没けりん不傳ハ柱門西儀東塔とニ儀  
もくア反よき巖の中大ト九鷲のこと多至ト一山の伏軸とも  
くかくん持了ハ一山居一塔のめさり傳ト深キ事ト志ヘシ  
要抜とよすは傳トリ江別アリテ坂の石より坂ナリ標名も  
ナリルがむと有くスカクトニ合ひる事とぞ

唐詩れねく扇の夢ト、滑りての葉冷うるし  
是傳教人師の方としひ持よ歎く、かのわくたをのひ相油りて  
あ度く扇あわねて御とどううく又を夢く、さくさく御  
辛房のを、葉夢の一株のねりうわもとがまくねの葉冷うる  
く又れひうき夙奈心込るキコ國同辛房のね、日暮君御名  
泰記す、承よあく東久ト人合二年九代教有天皇御宇佐尾女  
们あくねの精神性とまじて參り被參く、尊祖は祖主御清  
松の元よソツのやの大風ともかく、かく半りもゆび侍ひ、以  
來の御威もあくして抱よルハ太厚の板毛御及駿行ち令矛御  
袋を大トもくして抱よルハ太厚の板毛御及駿行ち令矛御  
の二人とはねのねのね、と恵みく情を語り、食事をもして極も  
やく、うねりく因縁うるねとて、中  
ト鬼く、うねく、象からく極らん、シテ而重く、人情と  
く、うねりも実く、シテ人情と詮ね方、天平  
九年秋のま人、幣五石ア殺して、シテ中すと後房

あつゝと氣もほゞ一幸當れ松の門内へ移れり者た  
候く本日死ふて西十七年候く本義卿極後とてうその後  
津海志曰山ねりよし元也於道邊洗更浴て和方と後  
くねよ極りぬしづ再び是(今)は  
在は候制の所とは其の事のまことうもあらず

笠候隨筆立卑

笠候隨筆六

目録

- |       |       |         |
|-------|-------|---------|
| 一志賀山城 | 一三寶島  | 一塔入庵 村考 |
| 一雞寔細男 | 一水無瀨宮 | 一金龍寺榜   |
| 一方丈室  | 一清谷古碑 | 一行切竹法   |
| 一杜鵑松  | 一青云巖  | 一奉友鴻    |
| 一園原山  | 一多田院  | 一將軍冢    |
| 一櫛山寺  | 一古武場  | 一鳴門井    |

一那智山

一竹生鴻

一  
假  
山

一 流陽辰星集  
一 東山文字

一人堰川

一 高雄紅葉

一字派門

一人食谷

芝陔隨筆六

志賀山城

よろしくおまち本醍醐御、うるまの里にて附家おのまにむけ  
きくらふすとまことに人へ事と紙ねうへと年直医院実際すく  
あれどいはぬ指もりくをまし行ひたゞんじよとの暗  
寫うるは御方神とまくへゆくをめぐきのあまのと報  
えうそむうれし自今以後に勝者と年次久和合の取引を勧  
められると仰られまことね

二  
賈島

醍醐寺後院より山林園を流醍醐、有佛法像とされしけもの  
未性盡集於る野山後夜半佛事偏多大師の侍行、寒林獨  
坐草堂晩二度之を受國一も一も有教人立候乞水俱了  
了了無心是也、既而下院二荒、夏敷先洗後別室、急寺立院  
は余日向圓覺、海藏御門大峯、同室生、嘗御加護於此、前  
叢山、上州赤木山、山中告人中故て作よと、大師多取のこゝで  
立物久處之を承氣といひ修造、懸トリ少く資、莫久取さ  
まへく當赤足以降了二度也



翌年秋の暮に御法事の本と  
蝶巣回る年の夏更湯へ移向とさすゆけし時を経てのした  
果と食ひやうへとけちの服一行より林の楓へ候べとせんと  
シテ居り

卷之五

信州飯方より下の村ミタニ七不思後セブシとも申すよりの飯方善賢寺に板  
の豆元年ヒサツノ是より後アフタと申すよりの飯方の三事の様の御記現  
在アリを終物スルモノと申すが一木間御水イチミツノミネと申すて三里並位一里ナシノ  
輶耕原曰東之虎丘面坂上ヒガタノマツリ有一巖高タカシ日也清朗將以幸大白翁秉  
其教則一寺之形勝悉於此見之但須反覆下耳ハ因有象可寓  
服幼少者トコトコアキラメ後行アフタの見ナシテアフタモアキラメシ久又同書  
松江城中育て候西日善興又西日延西南旅果東南曰奥至要監運  
家乃在信州之東而小室内郡有一村長寺许御無干西壁之と  
不如從行仍而未悉不考有或附身アタマシテ焉乞又不可曉アラシタ々々  
又洛西九条村の家付某トシノ者之脣アラタニ之信の氣既アリ則東寺

のをあよしにへきの頃うつてゐぬけし筆者トモもる事ふ  
らん。今年天海五年の暮りうちもあ活もとて裏の段へ秋もせ来  
もりゆく日々來言ひて居をもろや先座中とまさしておのやこし  
度と陵子と斜メ立てて乞う候の移りの基と舞。日暮活の  
附えども風吟拘欄ホリて口走る細うゑを輶耕派よしれ或  
附とて是といは人致しても多うともタゞとも多矣も  
移う未さうと遼次細一墨を要の所へが一曉うる止がて始  
亨主もほくとせり伏大音於どう書此の足あ人よ後は因りて  
容易うへるせざらう。亦いよいよく重ちりむ行うとソ。大  
是極く怪うる本うつ日新よ映らうあらう。日光東京原  
は附、全有公又ハ鉢形トモリ(エコソウ)の附しても武志と  
ハキ本と云ふ。誠後ノハカサヒセツル時とて家業の衰變愁  
きをみとめう是日光の間うよ附にて移す不ぞと云ふと

山城因西南難官ハ獨主ハ豈本主先ドリ王城ち度として信  
とく承宣ゆきせし地を後て今の里山す生産内にさせし方に  
山海の難主と早セし京畿トヨリん又ハ心伏シテ京福主である  
ハ秋原トヨリ榜を立て済川、波せし京畿の津ナリて往来繁く之を  
シムを今ハ榜本の名のみゆれり立了す里、庄市末トヨリ榜段有ると  
ソモモトヒ地トヨリ多くセし車も又ノハシ橋主の在在の権アリ  
のトヨリ多キの本偶人ゆづらも未久心と前てスルクトヨリ、奇く奇け  
シヌ者て信國の宣秋トヨリトヨリは也諸守使、馬頭御記御功  
皇后ニ韓志トクルんとて既て免不玉番移ムソクリトヨリ、若者  
人食被火光氣の形と見シ拂軍導ミシテシテまんとて告語りく  
矣毛子麻海内トヨリトヨリトテ先于殊滿珠の二顆トシ於あて保り  
て候代トヨリんノハアシトヨリニ韓汝休トヨリトヨリ至居同いよ  
シともト保りテ木ノ氣是國族庶流トヨリ其妻孫良といひテ  
毛子麻海内トヨリトヨリトテ先于殊滿珠の二顆トシ於あて保り  
て候代トヨリんノハアシトヨリニ韓汝休トヨリトヨリ至居同いよ

久皇辰日御ノ是もとを有す一翁曰伏生の入を爲樂と奏せしりく  
翁立て年老の財と名をもとて研良年人の姿とより海衣と名  
したひ腰巾一鼓と仄よけ袖と於て霞の陽く龜よみて海と  
うりゆゑくして作す連衣と至后則山珠豈娘今紀末至高祖時所著也  
とて研童と作りせて終多く以り波二顆と帰りゆきし逐小  
二輪と游伏本日是元年秋之月也かく隔離の後友頬に紀末幽志契所作  
是此年九月也二代宋承と向毎年暮秋番旅宮の翌日より養泉  
席男十人同女十人あり同僚樂と奏すもと向く行け毎の波  
風此年山房の本偶人ハ銅男の造形今南朝春日の若まの状年よりよ  
伏生セテ年より細男と有る今後秋よ二韓而代の取の鶴馬と  
ふと掛けねづる老臣山房以後作東紀曰細男と云有兩人取其  
則或内ち良友祚也と云々

水之酒宴

シテトウ西東ノ町ト水之浦敵文の役ト不ノモ後多麻院院の御靈ト  
家めまう歎仰トキ御是ト仕合ルト前水之浦度トシテ完成

沙門へたゞ改めて毎月廿一日の外々く本はほげ院院落にて  
處所ゆれくてま陰に波高きりうが帝天性加くひひあさをひひ  
見渡せたゞ山中かとしきて東門ゆつへ移とくかふぞひりん  
うと御製もうらすもか、一ノれと今まよどい事あるゆ御の度よ  
荷の木と栗の木と松並せられまくゆ今まて今の大す直方木  
架の木と柿の木と桑並せられまくゆ根立了れ、こび地と  
市ちよむをうひりえとくわくひくと日本門左の柱の上より  
御の酒へたゞの瓶ゆう圓よ白文瓶の次に右在邊とてせよなま  
し盃紙よりうるすの者たゞ眞一は御籠と柳入くるとくまよ  
作畫のかまとひやじひ課せしりしへとひ勇まと  
極く柳入くるとくまよひ急らね御端んて宋の門(入東桂)に  
流石の法盡う。した天佐の多よと聲を後代の志へとく  
自の身の形と善よわく沙門のねよゆ正に思へても思あ  
をくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
地よ深き法うの感通作よそも行ひ越りうき圓よ白文瓶よ

沙門本牛然坂長樂とソラ盗賊の唐本法圓と候ひ一ノれ付  
小誠者とて眞て記別ち也つゝ參う傍拂と拂互んとくゆ大師  
の廟前よ傍て忽焉と愧悔の心と生す則奪五戒の戒あくまで  
ト送り自ら戒と手拂く懺悔の心とうめきと書てゆ  
至る

ち堂と嘗めのれもくじけくとくみとおせ候は承り  
旅東南のみとのことを法の世事もと竟すうりきとやらゆうい巻  
トあうじ此と來て安坂よとくら法盡の張本うし者のかとく  
恵公信教のゆ殊安養院の室と盗人のありしがを傳よ歎く掠奪  
の衣被と送りまくしれ、蒙取は済と云ふうとくとく本  
りゆう人とて羞惡歸心の公うきくんやほよ本也あれ  
舊から皇祇の天佛よちゆくとく

金龍寺撰

抄写東生歌を書くは寺元千穂体師園墓下にて御人の方  
遠近よりうらわしく本よの書は書名拂ふとぞひとぞや

され候のとと巡遊山とて名前又ばよ世子をすら入相様とて  
衣本松林ゆう今へ古木うち大樹にて赤浦上齋と新古  
今集て山里よりうて風情うるそて松圓は仰

山里はまの夕暮とくこれへ入相を山とあそびりあ  
はうとし傍入相様入れの後うといへりく東野え入相の後  
とえの取てよわんへ入相様入れの後うといへりく又傍妙  
日寺のまみの夕暮へ、うきらわとあて足れい列の本多く只入  
れの後子のをのあ下りみりとほがへ在る事のとく全然幸すかと  
仰うと全く寺の接觸の後姿の後は相本と移てあらとの  
あらねよと入相の後とくまむのをめりかくして至つての後  
美根の東とく今まのみにとくとくもと風のせ早と  
庭のまめ地と敷しきくわの浪立りとまくこまく風景  
ううえ木林園は不の人うれへ古書放人方とひりく利根村の翁  
淳と碑と林草の別不材へ至るの爲（後拾遺集）南宮子原  
我名の本多の夏うこう所へ仕物のこととと成ゆく

毛並よ筋もせず又まの本とて畠井うきの帶よ麻芽ゑ  
とよ布うりうづくもむき蓋房わうふれと麻芽ゑとよ  
ううよひよを多うりうれ被圓うり附けをと通うりうよを多  
の尾うりうよと見く  
淡芽ゑとよと見替よみよく彼毛松のうへアキタクル  
と見うりうよと見うりうよく毛松と毛松と（則は不よ望とて  
あくよと見とと毛松と毛松と）後拾遺集と同法師の茂圓（因  
うううううよと見うりうよく  
淡芽ゑと見うりうよと見うりうよく毛しりうりう人と毛しりうりう人  
あらうりうよと見うりうよく

方丈室

京東ふ銀閣寺よりは不本意四事をまの過橋一豆利義の退院  
のれの故よ東京都と号ひ公府と櫻花貴族の長臣と  
桜花と本多ちようじ灰今世古義林と付代りと表して桜花

公の名をあてて寺内より三重閣から公麻苑院の金閣へ渡して造形  
行う般高と號められんとす。内より薨死しより友祐下院の高弟  
の三浦れど今般高といふ。乞求は多き事天皇御子在あり室宮  
一夫うじと号す。般高は本多利休の孫法よりおうんば通  
よ生せ一人と般高と称す。利休和敬清寂の意焉といふ事と  
いたちも般高と生ひ小室で坐して和とまんぢる。文  
昭元年大閏月吉々解説延代の附記不圓石古本は十日  
晩日わざにした時の高神風宗湛りあす。信く茶と歎  
答應す。立ちも相付、歎聞者樂人通ひよ。小寺体差う  
馬の春陰茶の付体差一人往てある。太谷元直者ね十人約し  
此家を附けよ。今後左近表間によづりよ十三間す。天下  
の主と接信す。まことにかう伏いと接少。今代たゞ小圓色那  
主茶と傳説とももあらず。桂かくしき處、ゆく古代雙持の風俗  
も。左近表慕す。公あらん人。此家の形勢と見て感美せまさんや  
と圓表以い。今のが町家の後次才と希に附りくと見てあが  
とつづり。左近表慕す。左近表は首板食防別系也。たゞし  
時町人と表人の規定とそりへ。町あよ佐苗字。左近表中  
序りそら者ハ町人と稱す。所謂三本房後裔ある。主あひ文  
あ表の主よ。そら奉り不の有利の上と云。そら者ハ皆表  
人と稱す。左近表今もす。

瀧谷古碑

京清水の游の本と。方の中ふと紙て山林。山路と瀧谷報と  
火光と。大拂の後。下りて。あら渾石紙と。と紙を。の左子。古  
木の根。年。下。年。月。日。私。も。戒。り。う。と。て。渾。陽。牡丹。初。吐  
葉。の。七。と。筋。付。下。年。度。く。立。あ。て。見。る。よ。う。と。の。傍。す。も。年  
号。戒。名。紙。主。の。ほ。し。丈。文。の。紙。出。く。られ。く。浅。く。而。し。灰。消。て。瓦  
瓦。く。紙。瓦。の。以。の。紙。よ。紙。も。く。れ。く。怪。す。と。紙。一。丈。丈。丈。丈。丈。  
も。立。と。る。う。と。な。ど。も。何。の。み。走。へ。う。と。と。と。と。も。も。半。仄。人  
不。審。を。う。の。う。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
も。か。う。ひ。う。付。手。戒。碑。報。又。山。東。と。向。た。し。と。差。そ。と。行。の。多。期。と。

トナリハ六七人のみよりけたを後ハ右尊高麗集よ

東山五祖演禪師

嗣法白雲頌

不共一方法不侶

一口汲盡西江水

洛陽牡丹新吐葉

墜揚塵勿處尋檣

双幢着自家底

佛照真禪師語錄 妙心寺六世住尾陽瑞泉寺語應仁元年亥三月廿六日入寺 拈衣大庾嶺頭提不起綠甚歸上座

牛裏

頂戴曰

洛陽牡丹新吐葉或人曰此石碑者有邦

門院

ノ下火ノ喝ニテ

万壽寺ノ立ル处次ト柿本寺ト云

首傍ハ如織俗とてもかくして雅と称ミ黒シテアヌア  
セハトモ自クタク今の人態と雅と至ミ本と名んて世の耳目と  
争フサシムと云フ人未況うろく因ト曰汀御ト大和(城)あ  
御よ十三載トシテ之佐近ト武烈帝ハ惡逆了内トナラ侍臣  
ホ既て大の氣海本ウロト至焉と造りもあつて入仰まつり  
約臣女房十二人内内又則挂りて御一もつもあらず十三の信と  
美シテと被ト笑樂烈の所代ヨリ我朝佛國ほし况や

石碑と曰國原篤信曰せアト十三の據と義薦く東古の風俗と从法  
と信と冥福と希望と父母天トナラ後ノ日セヨトツト百々自周  
忌ニ奉七事十三年近ナニ有ト十三佛ノ碑ト(碑と義薦の事  
ト)ハ傳と佛經の文トと書せて網トミム又萬人以下と尊  
信とら人殺生の内トトは名と付已リ石碑ヘシモトモセモル  
多シテ文字と朱と墨と色と墨と連波と以テ墨と墨と連波と文字  
たゞも(此是ト文字ト入テ)トソク延年トシテ竟アラ後  
世者も之を呼拂ひ之也

竹切竹法

育安日韓馬山アラ御ト後音繼真和尚毒死ト延治ノ御皮肉  
トを先半夏と邊に方と云能多喜と丹波方とて村人安喜に  
集う育行の入通トテラトと双方にち正反トニ元徒が人立前伏  
相手の声と便と役行とニ脛ト伐て素トテの曲板と毛がく駆  
引て身ニテ方と勝トテモ圓キ奉豊年と後出行ト義あは  
乞湯と太の日行と町人ハ除夜のちと人寂西アヒテ里人とモ

人半身の東京へ大元集うは者と行加持し妻の内介志く號大と  
消て妻も久々女房のひうち外れとも晴一色すよ元宿泥雀毛と  
浦に妻子と當ひ責しけて行かよ妻のえりよほひの思ふく  
役者より力加へぬくを以て彼者愚ニ若シじ御てく板賣とど  
くと現ひらむ現れゆ端是事久又彼法の信使の中より附く大  
きよもて馬うめく浦經のく爰うめりて以れ行く休りん  
しと見くと御と朝とて於て火大と既一けりのと  
門が浦宮よりよみうる水取と設てキテ投入便、縁とを  
く水と汲入縫も浮くとよ邊りうけ入門がて後の山  
手の急よ行至ゆくは後と勤ク大林と二物もて板奉に出  
役せう組りあ役と勤りのへからくば無食れ

松鶴松

松鶴の春づき声と絶び頃人初て坐東と更就火度たとへ初  
高と舞木と忘是板漢丁ねねの相立高く板圓は既に東西の  
山林と拂廻一樹下より年とこそとももくとえ東京活中と坐東

う子とおされと番え尾義教るに矣乃湯の内をねの産うる  
右ねよ年とあくやめとすにて毎夏狂歌のりのりあよ松  
鶴松と並二を後りぬ東の人にねト一社へ立すよ此年露靈の為  
ノ殊抜て今へ松鶴<sup>ノ</sup>とて坐すとまくとまくととくととくととく  
並年二京場門坐之今出門多す通すすすすすすすすすす  
初夏とく寺町活和院は門外とて教声と音すすすすすすす  
信ちやうとの坐すとそれへ又今浴年と松鶴<sup>ノ</sup>ととくととく  
りと松と人ちとけ本とひのとれいとすと死とちじし  
祇園向平と衣地小路二条の下とよとて宿川の方(も傍)キリ  
南藻へよと松風の季とて胸とまくす傷とまくす傷とまくす  
の風とまくと竹脇<sup>ノ</sup>大本のねとそとまくすあり<sup>ノ</sup>弱年の近ニ声安  
ト<sup>ノ</sup>其後松も代へ不後へあく今へ教子<sup>ノ</sup>も切拂て細くすじ  
ノ<sup>ノ</sup>筋の腰とまくとくの筋とまくねとも鶴のねとまくとくと  
波少路押山路り<sup>ノ</sup>昆布屋の裏の塙の向<sup>ノ</sup>よさんやと今へは

いは孤児も次第に白天晴和の夏天の舟をうらまの處  
山に登りせり供奉又精勤筑後ちん本にて候りとひのまこと  
さう積みてひ食事とくに日光の半より机の毛麁公ちの声く彼  
ゆそひぬくとゑ悲と嘆て乞と後声長く川口にあむのハ公  
こひまめひうして筋くすまひ伏乞と不之初幸南宗のるる  
主く京うち人志とひやとの御よどり支炭廢の毛麁金紙と  
登り怪しきをうそと人くとも物とねうと初近せり  
日光ふ毛麁心公とすま

青云游

無事にと歸事半ばもいたよあみ秋月夜の事  
湯火の心とまことに爲むのところへ人よえの處も見えん 小沢芦庵  
の走らすはひよる傷の急進公の事アラチ 暗黙主従爲  
青云齋

毒くもあらへる事より度々水逆の厄をこの如くにしむ  
よけぬる者而して病氣の水逆を免れたれども足らずと嘗てさへは  
ちとて支那風俗もまた余り多く奇異の事にてあらす  
來るるに至りて之等より学ばれ考入婦女とも報道もしくあ  
るる是故の事とて廣ひとんどの如きとて殊無も又不思議  
わざとて其の如くへ成る事友人より見聞してあ（ゆ）  
集く被圍の事とく

都人やねはうすすふ高うすは然とへまんりひ初わんし  
かて詔書よりおきと小野とくつて是肆りは下流二流とあら南  
美と小と体とく小さく流れて東源流と奥山と号す本源の天  
台山のち山と天原奥山と称さうむら陣思王はうよらとて庵丸自  
ら長伴と名す水音と西鶴と名すと沈思と初て梵唄声咽と劍  
遊と慈覺大師入庵修來と門上侍と良忠と人名と年号し  
南附と西秦の後今と驅く天原声咽の本心と友と一聲名も  
人名とくすとあらゆる事大師の名を傳へてあらまことえま東八流天原の

護りの如き、友郷東西小屋にと廻んで京へ出でて僕はもとけた  
毎日女仆とて、馬とて、あくまでも高木大老流小競り合ひて  
鳴きを立て、小京家太京家本舗にて、之に拾遺恩をよき家の分とそ  
秋の月とて、おとづれく賤女の心づるやうからぐらむの里

東石鴻臚上書

丹後國田舎の貧へ慶長年中和門無事大病を考の辰歳後年法下  
書立其以中院本廻を通勝後年也故よりて才人より遷されゆくに至  
也。小舟にて往來ひそく廻を出で、和室の間を深くまわらひ  
わくゆにて傍らしも居ありやう。此年の十二月晦日辰事の次ふと  
く海波の氣を歎め歎ひへるの事さうせて通勝湯せきとく  
いとあらや。翁お語り。一朝のくつ丈ねうとも忘れて湯せきと  
くぬ脉や。それよりくつ丈ねうとくぬ脉とくぬ脉とく  
いうとまへよ。すゑひて主別れか。いとまよほ爲め今より年  
夏清と早々うち散り未だ有の紙本。二又を長度子の秋石面と  
通圓の紙と先手て田舎の紙と先用をくり。右附細門の延者へ多くへ

子無城中ちよと奥へ奥せりとて園東へもとノルハ城中移す事  
うりしうと坐安あよぢうすにシテノト二男を委委元兵元席延大泥  
田より飛ぬうんと落車心と以ひて坐安の下知に任せよとく  
坐安こそ教日と経てて身うなづ通賈へひとせ金うのゆうたと  
身うなづと象う船へ舟う奪ふせりくへ今也足船をやうくと  
は本と船(まき)ひをひを本は忘劇の中とも厭いにひきよれりた  
まひ空とひの本ありやううつ身すく坐安すくおな侍役の  
御うねれがうれすくおおと甲冑と若しもとよ采幣と  
机う軍の並りの本より指南やされ、一概よりくも又も  
かくうる侍役の書わ石をくに放り、不く放りうる  
あけく候地とキスークヘのふあえの筋よ筋あくく也是物  
さうう筋うきみかんすくうりうく内筋りうく坐安石にて  
寛とまくとてキ候地の事すくら令くじく方をさめく  
とトあきてこそソイナリキ利を通す長くひくくは最  
ひと舟にまくとてふくも營むことすだに西に候実條烏丸光

度友を勧使として西魚の因こと解つてゐるに本とくへ故も  
思ひ表うて候てまひの事く教乗し京都不可代前徳院の事  
を語る事下へ園を尋拂ひ夕暮へ世と並び天香の名譽  
曰き綱か。今も方た相傳の事とす。の松とそらうといふ  
作はる院内府へもう坐安房道東松竹の處すともと  
了と佐吉玉庫鴻の形く擁護と云ふ事とある。

園玉山 木本

新古今集より坂上是則の事とく

至るやぬせあす生むもよ木のりといひて名の裏  
基優引て向件の木を深信法主の後その本ゆせんと  
いふ。本の裏くこれべ第と立ち極すと立り並くてそんがまと  
仰る本の事としむへり。とあるとまめのよたと仰るとま  
平友鶴春暉け起りうえ本當御の牛信法主毒箭といひ驛  
上り駒口城下にありて有りて日臨くとす。木本と云ひてゆま  
久原翁一の允信法主山谷の勢うねりとやれておなじとてゆま

今より、道と細く炭聲（音深く樹木轟くと曰ひ）遊遊に人  
里も稀。一葉向うくしてへりへりするよアラ、キ村といふ  
ト所へき年又度秋とし材と立てニ室斗う山祖と沙よと葉  
因の前の向うく木とソイソ目と面それば左のちのふうう七  
公月とからく谷われ、樹木聲く震ひて見る。木を轟くと  
四面を走りふくちを七筋りやもとんはを轟下う崖まで飛  
樹生角くして走りゆへき木とよからむ元下う木たうち巣と蒲  
いれ違ふさんやう半くこまく木とよすのせよえ松の形は  
くねを走らうく見くたうう根の木よ落すうもすて根の  
木あよて落木をまよ立延ぐれ役を下れと怪よ根と見えじ  
へくもと木本を根下うも入無う且大よとて根わくよる来る  
内の者の向うく木とよすの形あへ却うよ怪うるあれとまく  
立つて根本の木とよすの形へ只根あらずとも木本はほ又二三  
町も離れぬ所へくよもすとを放ちうみの猿へ根うる  
とく信りうくとく信りうくやもまの跡あう見くともあら

大木の傍らへまよひ、いりよもひし難く、とちぢめ、といひ合せむる  
事より、いとひゑきり、より猶不二を申附す。第、本多政次、信玄主事清駿親の  
所のものなり。不二あつて、此母老人の先年脇向よりよどみ好んで  
心稀本うちへと人と原り、後はのとうらふとて、かのわくせよ  
と教へて、たれの足と端まで見て、かねへ向ひの少しく腰下へ見  
渡す。樹木をうなぎのじうすす年より希と云ふるがよ、従事よ  
故んで、大木をそば希本がりし附りよ無く、一本もうと、御  
さうと足踏みし一歩と遠ひわざ多うて、仄にとて、  
とあく足踏み車すと、も再びうきし後年又えどともとそ  
くらへらんと、とくとくを抜き、とて忘れて見ぬを後もす、  
し、坂下車へを本の三とて居、しも板よ分よ源す、とて通う  
とあもへ、本本ともあくひま東のゆゑ多くて、關のうね東の  
人よ、車とひきとて、木樹やとおうと見え、とれまわせ  
ふ、二三百とまよて、あく文もあ、ひとひ紙うも入ひて、  
と傳へるの故件の本のとて、本多政次、信玄主事清駿親の絶ゆく凡穀もとめとす。

に五里と見て、善後飯田をすね中は門底合驛のちのとどもを原  
山とすものいひらう今掛ては平元文永天皇大宝二年頃く  
天慶國改義山道と聞くとけよとくと本のりう御乃とて往古  
の本音通う。在りてをたゞ々々カリ小タカリうんどの達難の地と  
て往來自然うさうとふと今の方へ開くとよきを後元時天  
皇の御子とては信濃お園の貢入海道よとて安政殿うこうし  
始て鐵橋と造りて車馬史よりうさんへ事務ともばれ鐵橋  
ともわん約十級梯と橋造りてはキテ不ともらんとむち人の  
傍り立とて布施左近いふと車かんは信濃とも限る林  
と山石と木と不失して妙味本らしくなり

多國院

攝所久坂より小笠室より南院へ移陣ち深瀬仲相後の左衛門と前  
不の名をせし廟へ一條院のゆき長徳ニ本八半ノ墓ト之幸多江  
遠言にて四秋逝後全身と涅槃トシ永く皇基トモテ度ト源  
家と擁護せんと終その懲一後世トモルノ一宏子ノ民今又

ゆく是陽門として況る國家本の吉凶りの所ハ本門廟の初にて  
教室となり人是れ感念久しくは代後大師門常文相に年始延一月と  
猶り真教りの甲冑を馬をもて平家の肖像を奉殿す  
而して又極き極義義家二代の徳と後けて万代のち後御とく  
寧々其奇蹟を威のりおほびて仍勤焉之極しア左より所廟  
廟の事石となく開き室多さ見えアテ大坂の者、被服を著て所廟  
の門前より走りて廟の尊宗奉事ありとくじ度よ公け  
の事アテ立ちあらずまゝ左より入て二位の位階と並んで更よ子  
戴の更後とせりとく高院什物あく白旗ニ流りテモ玄の四

見忠毅公  
不有每

仁因  
心乃  
來者

因義爲罰  
有己覽而已

同三行二

眼前散  
一朝花歎

貞明親王 花押

柳沢朝光秀峯ハ藤原氏の裏廻人職冠藤足公の靈廟ノ帳、攝州  
の小河底山ノ主ト、定恵鷺政旗の後今の柳沢秀義也トは争せ  
て、そぞくは天保元年、山東、川内、忽焉として尊像破裂、  
クテテ古事記にて、古今の世々とも、本同、卷主の廢れ  
ば、さへかへり、ひし（大忽焉と南朝とて破裂）の巻既に  
アミと傳（史別ある傍済戸と云ふ事多々あり）、果して御うけち  
は東天祐と至り、内、幣使と下りて、神志と相り、又元徒  
ハ行儀とすて、自らとち縁えのわく、恭々と取よ、未だとレ、大  
は齊爾（わく）と云ふ事の御廟とい、皆因の人也と云々を名づる御、  
遠近の人也と云ふ事、とあやうと、べく、ひびくに、き來ハ忍れ  
矣、人死へ地へ又お草根、魚放東、お花根、お家より、相撲天  
皇年安樂の教の役終つて、七人の夫人形、後、甲冑と毛をね

軍の伝と抜けくは都と曰世と傳へくちうりととあして程を  
のじて古事記とても海の山創せし本歴史と事すさんへ今も  
國を守る所と防へまとめて極うる本勢りと傳え人をも  
くすとく

橋波寺 駿

東に國見附の政りあるニ里より北上して既後阿闍梨  
堂あると寂翁寺の廻子小て則法堂より入の際授業略記の  
化者にてとうとあるやの久しがこうと二佛の中間に坐と文  
とをあらひ生まよ花と云ふ動の坐とゆんと坐ひて御丈  
人圓界と長寿たゞへ妙身とありと紀年既て於御殿にて  
落りゆのあと猶して寂人を附御水野及初極て別御座  
化蛇と葉木源室上人のは傳元と妻と又は皇室より奉行く  
なれば國而捨余町にて久々藍よりももくちと漏て油まと  
らうぐくば自色とあ事くして次急と仰す者あらず思ひて声と  
名せばひの豆うつて蓮房の豆の豆に良通とおあら車を

き茎の長さを丈と度して丈と下流りて走行へりやあらば  
とく又毎春春秋の彼宿本日より志教の者追ひて本集と  
伊佐と獻てわら車二を旅を渡て天下をめぐる故ゆゑと云ひて  
聖とすよ哉とてゆう幣あゆとさとゆうを最初の事よと改  
陽月の秋節と橋波寺の本尊は本尊とて御子と村人  
を般と寺とくら便り御子のをく一軒で附御うらとて不外の若魚  
て船をくら村の水練の老波は仕と表れて裸舟とくら乾のうう  
ゆう又波祭と序より接祀と行其水義て立游きと波の立中飯と  
やさかと左右よりて波津の祭とよと水宇押くらとくの  
ゆくべだしく向く波と波津のまきと初りがゆくねうと波津仕と盛  
うち波き祭とくら水底と沈んで舟が浮本波と波次もくに納  
本舟のやく一年とくとてまちと頃、拾平とくら舟とくら  
波多と仕向へ地と波波とよと祭とよもほよとくら帶も方と  
波多と仕向へ地と波波とよと祭とよもほよとくら帶も方と

タリ後五日十日頃一月二月又ハ一本半年と見て其の三月とる若  
ゆうて大取うと、終夕の夜数うと、どうもうせうねうと、を西越上一年  
半月日がきの名も書付正わねば是へれりね、又ハ行某う御め  
し御うと、御引一者大才よからむて是と併の袋と人別々水築  
御礼セキラ本一卷ハ稀ミ一旦水本（柳）くる參の事ニ淳ミトテ本  
筋ハ有とて後の山（桂）引御主は、とせまね後、彼君の山（山）之  
作物と、使て次々廻し、自生了、御事多シハナク雅くと、（山）トテ  
不思議ナリシのよーと、、故友とも未先哲も、（山）トテ、矣。

### 古戰場

今之せとみて首と、萬アリ達哉、又亦の軍と、とあい、と、も、元に也  
楠正成の、又早の古城、全罰、八十町下して、森山村ドリ、上、  
在在、よ少、ひそけ、上、道路、ウラ、事、よ、ソレ、城、も、あ、そ、て、而、半  
六間、西面、北接、立南面、西接、百、少、立、卷、用、城、長、百、拾、立、百、乾、ト、  
舊（據）根、甲、ハ、九、百、四、千、四、同、と、ソ、糸、城、の、人、一、族、と、勝、ト、奇、金、人、と  
立、考、は、行、卷、す、人の、支、勢、う、ハ、一、番、よ、達、（す）、ト、さ、く、く、と、却、く

無、百、欲、せ、く、東、太平、元、ト、う、る、い、う、ん、ハ、か、う、え、移、の、只、げ、大、半、年、  
よ、易、ア、フ、ア、モ、ア、食、ハ、切、も、う、れ、ハ、軍、將、追、ミ、罪、手、本、ハ、ヌ、ア、ト、う、な、考、  
山、ハ、陸、迫、ア、ア、ハ、後、う、る、全、罰、ハ、半、金、ド、ト、ハ、少、根、す、も、ま、ざ、  
用、こ、と、て、日、日、と、還、し、し、も、不、害、（又、毛、ト、ト、も、源、平、の、次、ハ、而、年、リ  
税、以、布、と、ソ、本、食、端、紳、志、の、を、候、う、ト、付、駆、界、も、あ、ア、ア、ア、  
キ、ク、ド、ト、ほ、よ、の、谷、の、巻、城、利、わ、く、さ、う、し、の、今、見、ア、ト、も、也、（一、谷、長、三、石、  
丁、余、授、或、半、回、斗、九、ち、九、十二、回、）と、只、少、石、う、さ、れ、て、た、よ、か、み  
ど、う、ア、テ、余、授、或、三、半、余、授、接、ハ、石、斗、九、ち、九、九、八、一、二、の、谷、の、石、  
十、回、か、う、ニ、の、谷、る、九、九、九、一、四、回、（一、谷、の、石、に、  
ハ、各、の、服、う、ち、九、九、九、一、四、回、）群、紙、と、ハ、少、少、紙、と、連、す、御、川、の、石、  
石、（一、門、裏、巻、友、の、石、ハ、一、年、の、よ、多、也、）（一、石、に、高、四、方、ト、色、金、上、  
と、被、高、く、岩、石、底、く、う、と、ソ、三、ほ、ニ、の、谷、ハ、ト、波、降、止、ハ、半、斗、  
（一、門、裏、巻、友、の、石、ハ、一、年、の、よ、多、也、）（一、石、に、高、四、方、ト、色、金、上、  
ア、ル、大、谷、の、白、と、石、ハ、文、よ、要、塞、う、び、も、ろ、も、經、不、富、（一、半、  
撒、は、の、谷、）も、基、木、枝、く、し、て、久、く、傷、り、折、ハ、東、ハ、ハ、ア、ス、モ、も、知、る

アリニベサヨウアリハシタクル人のアリ高シツキ  
ツメトモナシテ行考

赤糸回奥州の高シモアレ、浪高くよし、波之件のセヒト  
モ野半トシテ又北國も先の國、義理トシテ海波よ一村もそと長  
人のソフス古(國の事)で、而今一軍も海中うつと実學の家  
も今より後、氣て敵の死を海中うしとソトサホ年と  
達内仕官の能事、ものうれ、一の若年早々とも從事の比體  
ハシトモナシヤ、今、おと重ノ音ハシトモナシ

鳴門

河波閣と候路玉と向ひ、う海の面儀アニキ金町ノ瀬波の本浦也  
初秋四分の一の迅激ニ漏テ附内、海方の入深ドリ、又ヘキ少方搗摩海  
トメ出海、國主の御見との事、も海を小あ太岩多く石ともい、浦  
多アモハルの奥村、浦附ノ内、既たの海も少して、漁船  
ミニテ、漁り次第テ、漁盡、又附本、既く、渡路と水沸か  
て、則ト、ゆう南海の島、同一、も又銀、水沸かと、沸返らして、

ゆく、南アセ天、うつらく、うつ海底、而初、て雷の如く、震度を  
あ、トサ海、クヌギ、也、さる、さき、機木も初振、さりと、さす、  
只、我様子、少、の、る、う、み方、大震、ト、か、て、枝く、石門の、め、ま、と、  
ト、て、漁船、奔騰、て、南、の、方、う、せ、ん、ち、も、く、ね、て、走、す、よ、少、く、高、り、  
東、流、す、ゆ、く、度、う、う、漁、船、さ、入、船、と、頭、ひ、て、岩、石、碎、り、斗、  
走、ル、う、漁、と、ゆ、く、よ、船、う、て、あ、く、く、と、手、あ、く、  
の、は、漁、頭、上、て、漁、の、れ、は、船、も、ソ、ト、  
シ、テ、二、行、波、の、所、ハ、中、ま、の、海、ト、甚、ト、漁、少、う、南、海、ア、ラ、東  
キ、ト、汝、の、や、ト、ソ、ト、も、を、海、底、も、少、い、か、す、拖、入、漁、改、の、種、威、ハ、う、け  
き、ト、も、漁、船、と、本、の、迅、速、う、う、ハ、又、變、ら、人、烈、す、主、漁、の、附、本、を、  
ア、モ、ア、リ、船、ハ、い、く、よ、こ、モ、引、キ、少、あ、る、漁、う、付、小、舟、航、ト、十、分  
周、う、れ、ト、向、ひ、え、の、や、く、よ、て、船、も、生、火、加、て、秋、夜、ア、モ、火、航、よ、風  
ト、船、セ、ト、赤、シ、ト、リ、ト、漁、よ、少、ア、大、ト、い、船、船、う、う、も、か、も、漁、  
火、年、ト、東、波、船、ア、是、ト、ア、河、波、候、路、の、る、ね、里、と、渡、て、小、舟、と、以

とある中でも渤海へ又周防國大島の港をとつて西に向つて大湾とて  
長ニ五里の高と對して最ももむる二千石の平野より下へ阿列と倭を  
うち急激にまかれて右門のやすへんすてあらう渤海にて西よ爲る湖  
盈んじるうちや海底下より沸騰うち渤海の勢過るにて海水おれい  
て巴のまくすうすを系、又阿波より度くしてはわが手う猛瀨おきな  
志賀島同上がも手へ差すういふ又異栗の出戸もあがりぬるよれ良木すうの手平の船千石より帆船と  
ちて浪と裂く駆あら御政船先よみて日やりせば船とよみえ候く  
てか子音、帆と至重て帆魂とよみえ帆友同く櫛柄と櫛う生ひに  
一云も主一人立とて車と見てけよれく酒巴字の渤海のまゆへ並  
入や居伏天取と帆とよろどむとて印と帆うめくと云五斗  
舟與てウイヒ張り本帆よゑうく須臾う教十丁とをすくと櫛  
張落うち帆とを候ふ門是本丸と迅速ううるう壁とみくと  
かよもとくひねりぬからぬう帆へ裏歩わううえよも運びらる車  
うう車自景すと左院一門外去ぬ迎門今後迎門うともほれど  
は二十六ううてとい難一中よ多段の通門とし六月半よまく雨

少々の空氣通じて、人取二艘半のうち、一隻は御東要  
海次第より、北へ向ひ海水初より至る間白服船といふ者と、  
よりの浦の阿久根川河口に於て、船頭の所、本代作成の  
於正年も承り矣。而びくとおれ。

那翁山

巡禮總書二年二月の事也ハ一焉と京都六角宮よりし奉た  
書も未だアラ今、紀州船名、アリ初島ノ人故て御内のも國ナカ  
ニシテアリと國トアリシム。ソレシテ石川帝都の人のソラヅミニモナリ。モ  
アリシテアリ。中世以來國へ例々又想る靈場ニキニ示シ刻立して  
聖蹟巡礼と云ひ。國東國西と奉と云う。あくまで本山と云ひゆ。ヒ  
ケル御内の人とのハ和一也。アラ日本ノモ那智山。本鄉。多良美  
場。アリ。ハのそよ。シ宗教。アリ。次大食公。女房。アリ。近ある。ト  
運。アリ。ハ中後向。院。二年二月の滿。官佐。供養の儀。アリ。又。アリ。  
ラ。和尚。取扱の儀。アリ。是吉主。お詔。アリ。又。御於。年後。日暮。阿  
束。アリ。アリ。て。主席の奉付。アリ。アリ。と。承。アリ。

晴やくね身に浮きぬきより身の障りぬるを期すと  
と承して懇意に寺妙よりれいに捨服の候宣す  
奉りしも著しゆる様子は甚だ薄うも行ひ若しく之  
と御作仰らて同ゆく禮りうそゆく又御の御よ懷道婆本  
仰る太上天皇體に弘安二年初夏と書つるも之御席ハ無院と至り  
14年号へ後宇多院御を伝うれべ御遷位の候御事中とくノシ  
ニ止る秋ひよ楚殺生獄惡の石碑と云々那智久人傍傍たうと  
た妻女那智の源の事也とのもあく火を起ゆて一棟五千丁よ下馬  
移行る御宿の東門へ既く水者もすと名奉り大抵の五年行  
せう那智の源の事也とのもあく火を起ゆて一棟五千丁よ下馬  
移行る御宿の東門へ既く水者もすと名奉り大抵の五年行  
坂とよててこの門より松く先水もと面と御水御水御水御水  
滿て春の下の御水の處と稱すとて八万石の家ドリ高りうハ只  
白木すとて丈二尺と八尺と御堂事と、翁慈元人居と有ん水樂遠  
く送り四と向御と作くと食ちとて年高とさへい年は御  
えもそそ秦うかくの御と述て御と御と御と御と御と

不審極くよし家事より那智より舞うちよみ濱の上に一二の瀬が  
いづりナリとて位傍り奥にて二の瀬の少く年うね水を鳴の瀬とや  
とまで流るそれいかへ便きこゝらかく流り下りてと多く見ゆ  
けりえりてても妙う水下天井より通へルんま渓瀬くく妙  
雅くそあよ若妻巧う後の小角とそくら先使の細節處

周に向阿波國蓬原の本木編より、國野村の東農  
服材、五里寺とて、一ノ塔八里各とて、しりては大よ落す  
とて、里の毫之間四方斗の領と四半度石を以て、率を定め  
事より委ルルハ元すひの里石もあらず、度石もあらず、是も  
我國すことを以て、旅籠故也、かくして本うえ之

あらかじめ立寄異の寺二則院暨湖の北を下りて、山奥に通じ  
て、鷹巣石水關まで、重複路より、圓生をして、そこ往來する也  
表はるかの近う六十丁のところづくよすと、宿すての方を下

うく松林衣萼を秋傷十傷より日吉の首に階級のあらそ  
同士多く彼は身をもん竹生満浦よりつるよ木乃玉柱  
毎年三月三百公經寺よりもと清潔とよがくよ一木清行  
てもの如く私ニ乞東坡庵へ本庵と呼べり中世より松水二三丈  
余れ塔よりハ今ハ彼一庵也アリヤアモ移軒もそひ車と  
りつて繁く通す。本懶門日本懶人殿水廻と一本柱を附  
は小滿の後モアラルアラルアラル石橋とぞ櫛子もそひ車斗  
水面の下五六尺板附海中よりとひ傍トモトモ櫛子もそひ車斗  
シトコガ海陸甚色の蘆毛より魚をア因より是の海中亦  
走出アテ菖蒲の小草アテ葱公の化の古佛千体アシトモトモ角松  
シトコガ天蓋のシトモトモた法ハ失て新之御佛と安玉セアス又  
周より獨脚圓勾川ドリ東に府津とシテモトモ信樂といひ往昔加  
羅奉る社事も至人北條家一力延喜寺学校令の信松小トモトモ常  
陸弘トモトモ通ひのひセキ年久ナカタモ深風アリヤアラ  
アラヒ山信樂ちどりを下けアモのうの海畔よりはアラヒ山と

きる一方斗の菖蒲のらはすを仰りア見しアア社事も至人常  
アリテ漁あち民の教ひと教化アリアリア遠跡一典ナク松のね  
竹本の五アラと百疋アキツ木の根アシテ古雅アモのモ教誨  
アリケ猿の情アシテアモ也さ天海年間江戸水戸町の人アモ  
やカニ不アテ初より菖蒲ア走習アリアヒ其のさあア本ノア農  
のち跡アシテアモ也さ天海年間江戸水戸町の人アモ  
アリケ貴くモ見あせアメラクの恩情の人アモ也アリヤア

## 假山

王鬼ノ詩曰山門ねや造化惜不許世人至地。翁とさん伏人公  
アハ修閑ア遠くねアシテ孤舟ア夜す風氣勝化とま繪イア見ア  
のミ像ア文雅の公候アシテアシテ毛の庭前アモくのね系アモ  
足アリテモ用アタマアシテアシテアシテアシテアシテアシテ  
町村宿の以浦よもアリアアシテ又細川扇アラシアモ先賢をア送  
アアリ今諸寺の庭アリモ回松青ア浮シ在り人ハサモ乞アリ

此としのよしんは人帝都の一寺魏山より方よりを施りてたる紀  
約今世度と仰ぐて源職源は未流して河は紫野大寺の  
南面圓へ者一人大原井門主の別院にて水八重の假つと  
ト魚たる矣承て桂生せり水石の跡今傳する。

周<sup>1</sup>向帝都佐寺院の築山度の巧妙うる又墨太相傳の名画  
墨政寺<sup>2</sup>の新<sup>3</sup>、元<sup>4</sup>政平一年己未春公私セテ赤林泉名勝  
名會<sup>5</sup>、今セテ序ハ幕波三位季忠<sup>6</sup>、而て水竹居<sup>7</sup>と  
書<sup>8</sup>、ね本の人ハ思<sup>9</sup>、この次  
一西山西芳寺の度<sup>10</sup>、妄想圓師の製作化<sup>11</sup>、松尾院御ハ人丈の  
氣<sup>12</sup>と變<sup>13</sup>りと合せ<sup>14</sup>て造<sup>15</sup>りて不<sup>16</sup>後のふと<sup>17</sup>りひて國<sup>18</sup>  
度<sup>19</sup>は系設<sup>20</sup>りて寺石假木<sup>21</sup>  
一法藏天教寺<sup>22</sup>、有<sup>23</sup>之<sup>24</sup>後度同<sup>25</sup>、圓師の造<sup>26</sup>りを<sup>27</sup>水石の例に古  
樹仰<sup>28</sup>て雅矣天教の如<sup>29</sup>  
一國勝門寺<sup>30</sup>の法堂後<sup>31</sup>も又同<sup>32</sup>れり  
一源<sup>33</sup>於長寺<sup>34</sup>六細門<sup>35</sup>傍元<sup>36</sup>をト<sup>37</sup>りよ蓋<sup>38</sup>て今<sup>39</sup>の集<sup>40</sup>小東<sup>41</sup>

齋<sup>42</sup>相<sup>43</sup>行<sup>44</sup>ほの假<sup>45</sup>、虎のよ<sup>46</sup>と<sup>47</sup>と<sup>48</sup>て大岩<sup>49</sup>つゝ小岩<sup>50</sup>に<sup>51</sup>と<sup>52</sup>そ  
櫛<sup>53</sup>のま<sup>54</sup>か<sup>55</sup>て樹木の象<sup>56</sup>と<sup>57</sup>が<sup>58</sup>以<sup>59</sup>取<sup>60</sup>、經<sup>61</sup>の假<sup>62</sup>。

一東<sup>63</sup>山<sup>64</sup>林寺<sup>65</sup>修<sup>66</sup>文<sup>67</sup>ほ<sup>68</sup>度<sup>69</sup>も樹<sup>70</sup>あ<sup>71</sup>く用<sup>72</sup>ひ<sup>73</sup>寺<sup>74</sup>事<sup>75</sup>小谷<sup>76</sup>  
一西<sup>77</sup>八條尼寺<sup>78</sup>方丈<sup>79</sup>の度<sup>80</sup>も樹<sup>81</sup>あ<sup>82</sup>く用<sup>83</sup>ひ<sup>84</sup>寺<sup>85</sup>事<sup>86</sup>本<sup>87</sup>

一<sup>88</sup>す<sup>89</sup>化<sup>90</sup>化<sup>91</sup>斗<sup>92</sup>そ<sup>93</sup>方<sup>94</sup>赤<sup>95</sup>木<sup>96</sup>小<sup>97</sup>谷<sup>98</sup>

一初<sup>99</sup>修<sup>100</sup>寺<sup>101</sup>の假<sup>102</sup>、堂<sup>103</sup>亦<sup>104</sup>、<sup>105</sup>以<sup>106</sup>後<sup>107</sup>大<sup>108</sup>師<sup>109</sup>の假<sup>110</sup>と<sup>111</sup>傳<sup>112</sup>

一<sup>113</sup>玉<sup>114</sup>寺<sup>115</sup>豐<sup>116</sup>殊<sup>117</sup>院<sup>118</sup>の築<sup>119</sup>六<sup>120</sup>御<sup>121</sup>門<sup>122</sup>主<sup>123</sup>化<sup>124</sup>、<sup>125</sup>同<sup>126</sup>村<sup>127</sup>別<sup>128</sup>宮<sup>129</sup>後<sup>130</sup>水<sup>131</sup>尾<sup>132</sup>院<sup>133</sup>の  
門<sup>134</sup>主<sup>135</sup>方<sup>136</sup>町<sup>137</sup>金<sup>138</sup>の山<sup>139</sup>石<sup>140</sup>橋<sup>141</sup>とは<sup>142</sup>樹<sup>143</sup>あ<sup>144</sup>き<sup>145</sup>度<sup>146</sup>は<sup>147</sup>

一紫<sup>148</sup>野<sup>149</sup>大<sup>150</sup>寺<sup>151</sup>修<sup>152</sup>改<sup>153</sup>の度<sup>154</sup>を<sup>155</sup>更<sup>156</sup>新<sup>157</sup>、<sup>158</sup>化<sup>159</sup>大<sup>160</sup>門<sup>161</sup>達<sup>162</sup>の度<sup>163</sup>相<sup>164</sup>河<sup>165</sup>は<sup>166</sup>化<sup>167</sup>し  
く<sup>168</sup>就<sup>169</sup>る石<sup>170</sup>虎<sup>171</sup>改<sup>172</sup>石<sup>173</sup>と<sup>174</sup>寺<sup>175</sup>也<sup>176</sup>、<sup>177</sup>幻<sup>178</sup>化<sup>179</sup>是<sup>180</sup>元<sup>181</sup>木<sup>182</sup>町<sup>183</sup>家<sup>184</sup>は<sup>185</sup>  
水<sup>186</sup>閣<sup>187</sup>成<sup>188</sup>宅<sup>189</sup>と<sup>190</sup>して<sup>191</sup>と<sup>192</sup>候<sup>193</sup>セ<sup>194</sup>と<sup>195</sup>外<sup>196</sup>大<sup>197</sup>地<sup>198</sup>和<sup>199</sup>高<sup>200</sup>方<sup>201</sup>  
の度<sup>202</sup>不<sup>203</sup>く<sup>204</sup>古<sup>205</sup>法<sup>206</sup>系<sup>207</sup>後<sup>208</sup>年<sup>209</sup>と<sup>210</sup>大<sup>211</sup>吉<sup>212</sup>易<sup>213</sup>人<sup>214</sup>為<sup>215</sup>人<sup>216</sup>成<sup>217</sup>り<sup>218</sup>成<sup>219</sup>り<sup>220</sup>、<sup>221</sup>是<sup>222</sup>と<sup>223</sup>行<sup>224</sup>事<sup>225</sup>く<sup>226</sup>以<sup>227</sup>て<sup>228</sup>是<sup>229</sup>と<sup>230</sup>行<sup>231</sup>事<sup>232</sup>く<sup>233</sup>以<sup>234</sup>て<sup>235</sup>是<sup>236</sup>と<sup>237</sup>行<sup>238</sup>事<sup>239</sup>く<sup>240</sup>以<sup>241</sup>て<sup>242</sup>是<sup>243</sup>と<sup>244</sup>行<sup>245</sup>事<sup>246</sup>く<sup>247</sup>以<sup>248</sup>て<sup>249</sup>是<sup>250</sup>と<sup>251</sup>行<sup>252</sup>事<sup>253</sup>く<sup>254</sup>以<sup>255</sup>て<sup>256</sup>是<sup>257</sup>と<sup>258</sup>行<sup>259</sup>事<sup>260</sup>く<sup>261</sup>以<sup>262</sup>て<sup>263</sup>是<sup>264</sup>と<sup>265</sup>行<sup>266</sup>事<sup>267</sup>く<sup>268</sup>以<sup>269</sup>て<sup>270</sup>是<sup>271</sup>と<sup>272</sup>行<sup>273</sup>事<sup>274</sup>く<sup>275</sup>以<sup>276</sup>て<sup>277</sup>是<sup>278</sup>と<sup>279</sup>行<sup>280</sup>事<sup>281</sup>く<sup>282</sup>以<sup>283</sup>て<sup>284</sup>是<sup>285</sup>と<sup>286</sup>行<sup>287</sup>事<sup>288</sup>く<sup>289</sup>以<sup>290</sup>て<sup>291</sup>是<sup>292</sup>と<sup>293</sup>行<sup>294</sup>事<sup>295</sup>く<sup>296</sup>以<sup>297</sup>て<sup>298</sup>是<sup>299</sup>と<sup>300</sup>行<sup>301</sup>事<sup>302</sup>く<sup>303</sup>以<sup>304</sup>て<sup>305</sup>是<sup>306</sup>と<sup>307</sup>行<sup>308</sup>事<sup>309</sup>く<sup>310</sup>以<sup>311</sup>て<sup>312</sup>是<sup>313</sup>と<sup>314</sup>行<sup>315</sup>事<sup>316</sup>く<sup>317</sup>以<sup>318</sup>て<sup>319</sup>是<sup>320</sup>と<sup>321</sup>行<sup>322</sup>事<sup>323</sup>く<sup>324</sup>以<sup>325</sup>て<sup>326</sup>是<sup>327</sup>と<sup>328</sup>行<sup>329</sup>事<sup>330</sup>く<sup>331</sup>以<sup>332</sup>て<sup>333</sup>是<sup>334</sup>と<sup>335</sup>行<sup>336</sup>事<sup>337</sup>く<sup>338</sup>以<sup>339</sup>て<sup>340</sup>是<sup>341</sup>と<sup>342</sup>行<sup>343</sup>事<sup>344</sup>く<sup>345</sup>以<sup>346</sup>て<sup>347</sup>是<sup>348</sup>と<sup>349</sup>行<sup>350</sup>事<sup>351</sup>く<sup>352</sup>以<sup>353</sup>て<sup>354</sup>是<sup>355</sup>と<sup>356</sup>行<sup>357</sup>事<sup>358</sup>く<sup>359</sup>以<sup>360</sup>て<sup>361</sup>是<sup>362</sup>と<sup>363</sup>行<sup>364</sup>事<sup>365</sup>く<sup>366</sup>以<sup>367</sup>て<sup>368</sup>是<sup>369</sup>と<sup>370</sup>行<sup>371</sup>事<sup>372</sup>く<sup>373</sup>以<sup>374</sup>て<sup>375</sup>是<sup>376</sup>と<sup>377</sup>行<sup>378</sup>事<sup>379</sup>く<sup>380</sup>以<sup>381</sup>て<sup>382</sup>是<sup>383</sup>と<sup>384</sup>行<sup>385</sup>事<sup>386</sup>く<sup>387</sup>以<sup>388</sup>て<sup>389</sup>是<sup>390</sup>と<sup>391</sup>行<sup>392</sup>事<sup>393</sup>く<sup>394</sup>以<sup>395</sup>て<sup>396</sup>是<sup>397</sup>と<sup>398</sup>行<sup>399</sup>事<sup>400</sup>く<sup>401</sup>以<sup>402</sup>て<sup>403</sup>是<sup>404</sup>と<sup>405</sup>行<sup>406</sup>事<sup>407</sup>く<sup>408</sup>以<sup>409</sup>て<sup>410</sup>是<sup>411</sup>と<sup>412</sup>行<sup>413</sup>事<sup>414</sup>く<sup>415</sup>以<sup>416</sup>て<sup>417</sup>是<sup>418</sup>と<sup>419</sup>行<sup>420</sup>事<sup>421</sup>く<sup>422</sup>以<sup>423</sup>て<sup>424</sup>是<sup>425</sup>と<sup>426</sup>行<sup>427</sup>事<sup>428</sup>く<sup>429</sup>以<sup>430</sup>て<sup>431</sup>是<sup>432</sup>と<sup>433</sup>行<sup>434</sup>事<sup>435</sup>く<sup>436</sup>以<sup>437</sup>て<sup>438</sup>是<sup>439</sup>と<sup>440</sup>行<sup>441</sup>事<sup>442</sup>く<sup>443</sup>以<sup>444</sup>て<sup>445</sup>是<sup>446</sup>と<sup>447</sup>行<sup>448</sup>事<sup>449</sup>く<sup>450</sup>以<sup>451</sup>て<sup>452</sup>是<sup>453</sup>と<sup>454</sup>行<sup>455</sup>事<sup>456</sup>く<sup>457</sup>以<sup>458</sup>て<sup>459</sup>是<sup>460</sup>と<sup>461</sup>行<sup>462</sup>事<sup>463</sup>く<sup>464</sup>以<sup>465</sup>て<sup>466</sup>是<sup>467</sup>と<sup>468</sup>行<sup>469</sup>事<sup>470</sup>く<sup>471</sup>以<sup>472</sup>て<sup>473</sup>是<sup>474</sup>と<sup>475</sup>行<sup>476</sup>事<sup>477</sup>く<sup>478</sup>以<sup>479</sup>て<sup>480</sup>是<sup>481</sup>と<sup>482</sup>行<sup>483</sup>事<sup>484</sup>く<sup>485</sup>以<sup>486</sup>て<sup>487</sup>是<sup>488</sup>と<sup>489</sup>行<sup>490</sup>事<sup>491</sup>く<sup>492</sup>以<sup>493</sup>て<sup>494</sup>是<sup>495</sup>と<sup>496</sup>行<sup>497</sup>事<sup>498</sup>く<sup>499</sup>以<sup>500</sup>て<sup>501</sup>是<sup>502</sup>と<sup>503</sup>行<sup>504</sup>事<sup>505</sup>く<sup>506</sup>以<sup>507</sup>て<sup>508</sup>是<sup>509</sup>と<sup>510</sup>行<sup>511</sup>事<sup>512</sup>く<sup>513</sup>以<sup>514</sup>て<sup>515</sup>是<sup>516</sup>と<sup>517</sup>行<sup>518</sup>事<sup>519</sup>く<sup>520</sup>以<sup>521</sup>て<sup>522</sup>是<sup>523</sup>と<sup>524</sup>行<sup>525</sup>事<sup>526</sup>く<sup>527</sup>以<sup>528</sup>て<sup>529</sup>是<sup>530</sup>と<sup>531</sup>行<sup>532</sup>事<sup>533</sup>く<sup>534</sup>以<sup>535</sup>て<sup>536</sup>是<sup>537</sup>と<sup>538</sup>行<sup>539</sup>事<sup>540</sup>く<sup>541</sup>以<sup>542</sup>て<sup>543</sup>是<sup>544</sup>と<sup>545</sup>行<sup>546</sup>事<sup>547</sup>く<sup>548</sup>以<sup>549</sup>て<sup>550</sup>是<sup>551</sup>と<sup>552</sup>行<sup>553</sup>事<sup>554</sup>く<sup>555</sup>以<sup>556</sup>て<sup>557</sup>是<sup>558</sup>と<sup>559</sup>行<sup>560</sup>事<sup>561</sup>く<sup>562</sup>以<sup>563</sup>て<sup>564</sup>是<sup>565</sup>と<sup>566</sup>行<sup>567</sup>事<sup>568</sup>く<sup>569</sup>以<sup>570</sup>て<sup>571</sup>是<sup>572</sup>と<sup>573</sup>行<sup>574</sup>事<sup>575</sup>く<sup>576</sup>以<sup>577</sup>て<sup>578</sup>是<sup>579</sup>と<sup>580</sup>行<sup>581</sup>事<sup>582</sup>く<sup>583</sup>以<sup>584</sup>て<sup>585</sup>是<sup>586</sup>と<sup>587</sup>行<sup>588</sup>事<sup>589</sup>く<sup>590</sup>以<sup>591</sup>て<sup>592</sup>是<sup>593</sup>と<sup>594</sup>行<sup>595</sup>事<sup>596</sup>く<sup>597</sup>以<sup>598</sup>て<sup>599</sup>是<sup>600</sup>と<sup>601</sup>行<sup>602</sup>事<sup>603</sup>く<sup>604</sup>以<sup>605</sup>て<sup>606</sup>是<sup>607</sup>と<sup>608</sup>行<sup>609</sup>事<sup>610</sup>く<sup>611</sup>以<sup>612</sup>て<sup>613</sup>是<sup>614</sup>と<sup>615</sup>行<sup>616</sup>事<sup>617</sup>く<sup>618</sup>以<sup>619</sup>て<sup>620</sup>是<sup>621</sup>と<sup>622</sup>行<sup>623</sup>事<sup>624</sup>く<sup>625</sup>以<sup>626</sup>て<sup>627</sup>是<sup>628</sup>と<sup>629</sup>行<sup>630</sup>事<sup>631</sup>く<sup>632</sup>以<sup>633</sup>て<sup>634</sup>是<sup>635</sup>と<sup>636</sup>行<sup>637</sup>事<sup>638</sup>く<sup>639</sup>以<sup>640</sup>て<sup>641</sup>是<sup>642</sup>と<sup>643</sup>行<sup>644</sup>事<sup>645</sup>く<sup>646</sup>以<sup>647</sup>て<sup>648</sup>是<sup>649</sup>と<sup>650</sup>行<sup>651</sup>事<sup>652</sup>く<sup>653</sup>以<sup>654</sup>て<sup>655</sup>是<sup>656</sup>と<sup>657</sup>行<sup>658</sup>事<sup>659</sup>く<sup>660</sup>以<sup>661</sup>て<sup>662</sup>是<sup>663</sup>と<sup>664</sup>行<sup>665</sup>事<sup>666</sup>く<sup>667</sup>以<sup>668</sup>て<sup>669</sup>是<sup>670</sup>と<sup>671</sup>行<sup>672</sup>事<sup>673</sup>く<sup>674</sup>以<sup>675</sup>て<sup>676</sup>是<sup>677</sup>と<sup>678</sup>行<sup>679</sup>事<sup>680</sup>く<sup>681</sup>以<sup>682</sup>て<sup>683</sup>是<sup>684</sup>と<sup>685</sup>行<sup>686</sup>事<sup>687</sup>く<sup>688</sup>以<sup>689</sup>て<sup>690</sup>是<sup>691</sup>と<sup>692</sup>行<sup>693</sup>事<sup>694</sup>く<sup>695</sup>以<sup>696</sup>て<sup>697</sup>是<sup>698</sup>と<sup>699</sup>行<sup>700</sup>事<sup>701</sup>く<sup>702</sup>以<sup>703</sup>て<sup>704</sup>是<sup>705</sup>と<sup>706</sup>行<sup>707</sup>事<sup>708</sup>く<sup>709</sup>以<sup>710</sup>て<sup>711</sup>是<sup>712</sup>と<sup>713</sup>行<sup>714</sup>事<sup>715</sup>く<sup>716</sup>以<sup>717</sup>て<sup>718</sup>是<sup>719</sup>と<sup>720</sup>行<sup>721</sup>事<sup>722</sup>く<sup>723</sup>以<sup>724</sup>て<sup>725</sup>是<sup>726</sup>と<sup>727</sup>行<sup>728</sup>事<sup>729</sup>く<sup>730</sup>以<sup>731</sup>て<sup>732</sup>是<sup>733</sup>と<sup>734</sup>行<sup>735</sup>事<sup>736</sup>く<sup>737</sup>以<sup>738</sup>て<sup>739</sup>是<sup>740</sup>と<sup>741</sup>行<sup>742</sup>事<sup>743</sup>く<sup>744</sup>以<sup>745</sup>て<sup>746</sup>是<sup>747</sup>と<sup>748</sup>行<sup>749</sup>事<sup>750</sup>く<sup>751</sup>以<sup>752</sup>て<sup>753</sup>是<sup>754</sup>と<sup>755</sup>行<sup>756</sup>事<sup>757</sup>く<sup>758</sup>以<sup>759</sup>て<sup>760</sup>是<sup>761</sup>と<sup>762</sup>行<sup>763</sup>事<sup>764</sup>く<sup>765</sup>以<sup>766</sup>て<sup>767</sup>是<sup>768</sup>と<sup>769</sup>行<sup>770</sup>事<sup>771</sup>く<sup>772</sup>以<sup>773</sup>て<sup>774</sup>是<sup>775</sup>と<sup>776</sup>行<sup>777</sup>事<sup>778</sup>く<sup>779</sup>以<sup>780</sup>て<sup>781</sup>是<sup>782</sup>と<sup>783</sup>行<sup>784</sup>事<sup>785</sup>く<sup>786</sup>以<sup>787</sup>て<sup>788</sup>是<sup>789</sup>と<sup>790</sup>行<sup>791</sup>事<sup>792</sup>く<sup>793</sup>以<sup>794</sup>て<sup>795</sup>是<sup>796</sup>と<sup>797</sup>行<sup>798</sup>事<sup>799</sup>く<sup>800</sup>以<sup>801</sup>て<sup>802</sup>是<sup>803</sup>と<sup>804</sup>行<sup>805</sup>事<sup>806</sup>く<sup>807</sup>以<sup>808</sup>て<sup>809</sup>是<sup>810</sup>と<sup>811</sup>行<sup>812</sup>事<sup>813</sup>く<sup>814</sup>以<sup>815</sup>て<sup>816</sup>是<sup>817</sup>と<sup>818</sup>行<sup>819</sup>事<sup>820</sup>く<sup>821</sup>以<sup>822</sup>て<sup>823</sup>是<sup>824</sup>と<sup>825</sup>行<sup>826</sup>事<sup>827</sup>く<sup>828</sup>以<sup>829</sup>て<sup>830</sup>是<sup>831</sup>と<sup>832</sup>行<sup>833</sup>事<sup>834</sup>く<sup>835</sup>以<sup>836</sup>て<sup>837</sup>是<sup>838</sup>と<sup>839</sup>行<sup>840</sup>事<sup>841</sup>く<sup>842</sup>以<sup>843</sup>て<sup>844</sup>是<sup>845</sup>と<sup>846</sup>行<sup>847</sup>事<sup>848</sup>く<sup>849</sup>以<sup>850</sup>て<sup>851</sup>是<sup>852</sup>と<sup>853</sup>行<sup>854</sup>事<sup>855</sup>く<sup>856</sup>以<sup>857</sup>て<sup>858</sup>是<sup>859</sup>と<sup>860</sup>行<sup>861</sup>事<sup>862</sup>く<sup>863</sup>以<sup>864</sup>て<sup>865</sup>是<sup>866</sup>と<sup>867</sup>行<sup>868</sup>事<sup>869</sup>く<sup>870</sup>以<sup>871</sup>て<sup>872</sup>是<sup>873</sup>と<sup>874</sup>行<sup>875</sup>事<sup>876</sup>く<sup>877</sup>以<sup>878</sup>て<sup>879</sup>是<sup>880</sup>と<sup>881</sup>行<sup>882</sup>事<sup>883</sup>く<sup>884</sup>以<sup>885</sup>て<sup>886</sup>是<sup>887</sup>

の寄ふといつてね本の人へ東西と奔毛にて石川東とゆじ今  
はよを一二と記してやぐのへよせんとまち東たのめへと尾山六  
月三百より九月迎事物と解てお手せりを承應わたらば化灰  
一从法衣席不持の參拜自らもと灌頂記一冊因自画山水の履慶寺跡

うり又一切縫の巻帙細密更廉のせよとあらうるを  
柳尾六月廿日より今七日より、かくかくよ人画像画日移

相尾シ六月廿四日より以テ至廿九日止  
此より人画像志用竹刷毛筆の筆  
ナシて自賛(いづち)を假借(かじき)  
筆耕本三卷源(げん)テは眼十二天の画師  
ゑと人入多(たぬき)天井(てんじょう)委(まか)し  
自筆一幅(いづつ)とすよはれど  
不(ふ)い粉(こ)ゑ入(いり)度(ど)天(てん)の深志(ふかしげ)  
の玉(たま)一(いっ)本(ほん)扇(せん)之(の)春(はる)乃(おの)秋(あき)の意(い)

妙蓮寺又後指原院宸輪の法華經と精緻  
十念寺ノ佛鬼軍界一卷

令蓮寺より  
太恭侯陸守より  
秦の川情の像  
異称うつりの

夏侯鳳之藏書  
李思隱注解卷之二

本欲す。水落清心銀盤青の内帆移す。走づる日蓮との墨

要法寺より偏太尉義家の甲冑箱から奥の古物

十方庵曰狩野景宣次第元信へ承ての取扱局の山水を多くと  
り之を因(アシテ)る。那羅(ナラ)と云ふ者も之を考へる。

日本より北の小島の事あらずとすばり莫よ名画うそとし  
鳥居と松東本雅のうそりとくに是國まで夷うちの本やが

妙満寺と光明院の邪道廢寺の  
やうなところがござつたのである

御恩院より家光大師名紙形画像白川流墨少賀行徳四十八巻  
銀亮大佐画圖書宦家掌記とし連年は古ハ古代の物ナシ國の  
慶とよ里ち風奇進朱下りる末の懲宗皇之帝の白麿の  
景山外御渡の名画教不<sup>ア</sup>リ

一寺町大雲院より後陽成院物類から、鐵田信長より、貞安  
和尚所の陳園又玉洞山水の画紙、あるもの金石、美善殿、金版  
東山雲葉院より法眼、眼毫の画人等と称す。うち  
一めむき方丈信政多文書画教示、委儀方丈、あくまで其點と附れ  
矢の根。

一東寺より弘法大师より傳教大师、福々書簡二篇、安八窟  
主の額大師、輪を亦不朽の法叢書、画卷等  
一南禪寺より法眼、眼毫の墨探出、吹水虎の画、法眼永徳等の  
令伏扇もの展風を収

一相國寺周上國法、用ひらう荷舟小物の曉辞六月十七日、法事より  
元毛は別佐木本家の寺附、承りもあらず、公府より居て終世の寺足  
一山修寔寺より退僧の恩西、ワセより、聲出の小船木、  
一東ふ鳥基寺より、あらまとの像、國源、妄什物教宣跡、ヒヤの子  
利休化の筆の亭又寺號す。

一天祐ちより宗懲宗室、帝の画丹袍の達磨の像、之類の名あ

うる、妄想も歸不朽の法叢同表、改定あり。

一岱覺東禪寺より長へ圓より幅、口の匣、像、北、司の名と、本朝  
云類二を下至一圓師の法物和漢の書画

一二條誓願寺より源本、合巻の繪、展風から、凱方の展風と  
号す。和葉田勘公の庭風、承良充、うらわ

一竜谷寺より法華の天舟、拔戻、持野、承、使等とせし傳伊、瓶、布の  
火、水と附て後失く。

一中法寺より、雪舟画十六度漢又法眼、秋虹の像と、本牧、

云服本の書画、口蓮と人真波、改幅あり。

一本隆寺より、口蓮と人三判の額、同本毛の豐院、嚴法業、ハ、船、  
九葉にわづか、口蓮の實、カ、トして、は、お、傳の曼陀羅あり。

一人徳寺より、後醍醐帝宸翰の船、詠集、大灯圆師の書、皆行  
猿、牧、漢、二幅、對、大、疣、治、監、うは、元、史、画の馬、古、眼、輪、輪、人、化、病、の、馬、

末の懲宗、是帝真筆、鵠鵠の繪、雪舟、丹、鷺、鬼、六、信、画、教、大、使、策。

葬し外諸侯の墨画跡、秋河源相所、伊當秋聲是小栗家且  
ち佐々木、おもて眼探松木の画、安井戸茶菴丸奉先の名の茶菴  
筆記、歌、人休和尙の不老の翁物語、茶の寺院をく  
其宗祖の真蹟ハシメテ及び又表奥ゆかの類せよ、表シテ御子も  
号考南禪寺本林ちうらとすと號セヨ又印金行在  
阿蜀虹瓶夷鄉小瓶手本也、記さういふる事、持院  
二重院七百のる史、セヨ、香積院金閣浪閣等又同ト

一、走に寺二十八組の画像、あまね書號を付祖師、お光真蹟、  
一、溪の画旅、日本三幅對ノ世よ名も、  
一、南徑寺中龜鵠妙法の不動画後將、楠正儀の書號を付  
左書画教幅、り、かて長安洛陽の瑞寺院、七百のるをく  
累代のを參定、と云拂ひ、八祖、一、寛門跡、方々、つゝ、屏風  
と許、り、タト、うり、り、り、り、屏風、追々考記ミテ

### 人文字

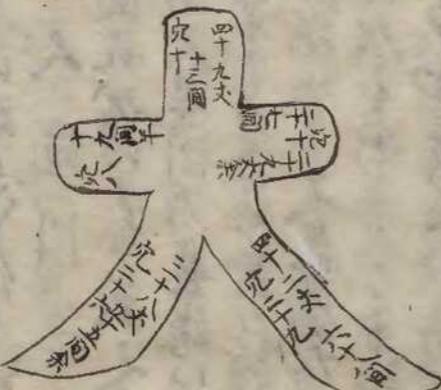
東山匠の文字、ハ、10間に引るとして大ね七種の机

一、二把、次二把中のは、二把、お前のね、半把、焚れ、を、卷み、ケ、不生  
れ、と、お前のまき、東宮、每、年、七月、宣、英、省、東、山、  
と、よ、が、大、文、字、と、要、人、文、字、の、要、法、た、の、や、

仕へ、と、弘、法、大、师、の、筆、似、う、う、とも、も、

室町家、鷹昌の内相國寺、模、門、京、二、の、書、れ  
う、う、ぐ、友、よ、修、並、よ、高、也、と、ひ、と、う、九  
禁、の、民、之、七、月、高、ト、う、禁、本、と、よ、た、伐  
乾、り、て、毫、て、ね、百、束、と、役、け、至、日、中  
の、利、ド、う、是、と、か、本、斎、う、を、完、無、候、

ミ、お、み、日、の、渡、じ、と、ゆ、て、先、ど、下、り、始、  
す、お、天、う、れ、し、是、と、宿、と、て、役、を、下、る、紙、の、形、う、ね、多、く、少、な、山、  
よ、ち、舟、一、文、字、少、く、た、大、文、字、の、多、く、無、少、な、人、く、け、了、少、  
て、或、様、ド、う、キ、と、か、て、え、ま、す、登、う、て、仰、キ、う、少、少、紙、よ、一、



の状態世人を驚かし人津の人曰く秋深きの夜大敵よ影西  
邊にうつるゝものと見取れ十室余九室の大光火敵也と陰映して  
波と煙と似て左了治と因くお酒食と煙草とお茶碗  
などと寝よ左も三一時後玉不知火と鹿苑後の山中宿くと酒  
食もかけ帰らと往ひ般之後とぞ見えあらずと因く

人譜

山城幽遊記のまことにひほじ高心事極本領を食て立ち  
て大堰川の長流に寄りてあらかく源氏移へ立ちて虚を意  
の臺車もとよき殿の天香茶屋牌門へ附り向の明治川に  
立柱の橋の又葱先だらねの向くよも桟道の籠すも桟  
橋一列く開キそとあくびかくひかくひ遠くへせんじよ  
桟橋のよきよかくねが良りす桟橋にて一旦と名月夜の二亭  
お茶くちうひ橋(名亭のれい亭)と呼べてよしとて源之助  
教町又能と汲入公室のよきよせんじせん細く縫て水道と  
便りもくわくしく門を構へり此をあると發る月小一月に

より納涼へ行ましに附の忙穀もしくて在しを節も而中へ坐す  
くを物思れり行どうといたる事生じて幕末廿一年の秋也ハ佐田  
と並人俗もすまよ秋よりものく候て、松原へ移るゝて考  
そすと仙徒の事よりもかく向づくわくと云々戸之森門、大井門の別名  
きうち門とすらちく御多くしてあるひ跡にし御く十七浦門  
と云うとく也坦々源へ向ひあらゆる事すとや其之のめぐらせ  
幸へりしるゝと傳へ古事記傳抄下卷第十九章(事と無事抄)も  
本音へ、後の三源すとすらううと慶長十九年甲辰の角金す  
名と云々佐野和洋門とて供奉とさることなく西門皆般とをもと  
てと候御ゆゑん大井門と稱す丹門保津門と呼うて是もと見る元  
末水利と聴く性として工役と云ふれ候よ お食と乞ひあつ  
て慶長癸亥年丙午の春より業としりて先水井よりの松の巣  
とよもぐく落葉<sup>品</sup>とがすと段根長之夫固ニ夫柄と云夫平、付て松平  
人純とて松上立す水井(被り人然根は夫既うくつよ夫碑)ノ夫存  
友利水井と出立へ烈火とびて燒却すと度すと云々い五と見て

門幅と狭くして水と溝すら極めて水の底は石の上に鑿てト  
流と向て秋八月よりもて切うてわびよて丹別世在村ト初  
取より五穀培石伐木本木心す因をて移りて民を利しむる事  
今より又まよひて書とねを傷字の怪富先生と而にけ  
きに拓げて門とて興る先生刊ち青石激湍の急と改め白浪  
を義事とらやせと復元限と年次明治 溪渓巻て水先石と陽子と  
既渓盤陀とモト一友石相向して至る二千方平り様子と並て石  
ト石子と並紙不と呼後述と旧名 積也石突万巻の書と後述とあ  
キシムと群書と某久明治 又不よ石門篤アラタハシ くうす度す度に立  
友平アラタハシ とそを多くてゆ而今又うふと石門園とも又高門ともい  
急流とて松の花がわすれぬと多取附と名付明治 付丹別  
水底より相生と清和帝在て御幸らて松真とるをアリとて  
置する岩野うち半千丈ナキを岩下水勢未だよと激湍  
てく水の石とあらや先とまかと年次不偶易す下泉ある  
と蒙とよと更に境の長ちよ少く又堆石ひく方々平りをも引

カヤー省と摩つてう後石と年次公印下と清和秋りよせと傳よ  
丹波上古ハ湖と水都と有て丹波と之大山宿禰と穿て水と變  
國原水酒魚とち水と變て秋と變て御と林御と人則今之  
松尾大僧正也うりと云

私ノ角念と双光院とて其源氏初りへ高向とて後に角念  
と改じ室若と共七としとて後より以て改号し中村氏  
天文二十三年甲辰より家系羅、の後う碑文と奉す慶長年  
九年甲辰七月廿二日六十一歳して没せりを要歲ひて天豐園達  
て先づ名をし附達をとくがくハ松り有像と伝て大豊園の例  
より巨綱と仰て之とぞと一梨カラスと林とて石越と連座と云  
延てう石子と送らる住せて傳文と叢山林氏とえて走つてう故  
ク其之之へ貞順と名は通称と與て京洛に素庵と号す惺高  
先生と號ひ文章と長く存す澤衣と美にて傷書と傳せらるえ

## 楓葉

支那の木又楓も紅色とて深閑寂寥の景とて多

て従うて是徹書記の極矣々然人あく飲樂の便と成つて至  
と歟ひとを本のる伏らひにうち従事高今寺中ニ三樹  
人そりに於しノ妙ヲ求又はのあへてと多々と爲す今移來通天  
橋下の紅葉浦より附れて左本教林<sup>左</sup>を以て娘トモ事と身<sup>身</sup>近雅  
寔丈人酒肴と並び<sup>並</sup>よしの<sup>の</sup>し在<sup>在</sup>自能と茶席と設けて飲  
墨と如く若のた右<sup>右</sup>遊序と爲て娘のれ井り多<sup>多</sup>に於て墨量  
とソアレと今つうて柳樹<sup>柳</sup>とまのむと安<sup>安</sup>とすの<sup>の</sup>  
と<sup>と</sup>色やる尾柳尾とまと人京ドリ小ニ墨石をと<sup>と</sup>もそ  
と<sup>と</sup>て前門<sup>前門</sup>往け<sup>往</sup>て深<sup>深</sup>て柳尾寺<sup>柳</sup>金櫻<sup>金櫻</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>多<sup>多</sup>の<sup>の</sup>泉  
も入寺墨<sup>墨</sup>柳樹脇下<sup>脇下</sup>教林<sup>教林</sup>佛殿<sup>佛殿</sup>妙<sup>妙</sup>人<sup>人</sup>の廟<sup>廟</sup>と<sup>と</sup>洋  
こそ二尊院の廟<sup>廟</sup>と<sup>と</sup>也<sup>也</sup>ノ<sup>ノ</sup>少<sup>少</sup>人<sup>人</sup>に<sup>に</sup>移<sup>移</sup>と<sup>と</sup>鉢<sup>鉢</sup>と<sup>と</sup>不<sup>不</sup>谷  
川の東<sup>東</sup>多<sup>多</sup>楓<sup>楓</sup>多<sup>多</sup>の<sup>の</sup>葉<sup>葉</sup>と<sup>と</sup>多<sup>多</sup>人<sup>人</sup>の<sup>の</sup>廟<sup>廟</sup>と<sup>と</sup>洋  
移<sup>移</sup>と<sup>と</sup>深<sup>深</sup>て<sup>て</sup>谷<sup>谷</sup>と<sup>と</sup>流<sup>流</sup>て<sup>て</sup>又一移<sup>移</sup>り是桂尾<sup>桂尾</sup>と<sup>と</sup>門内<sup>門内</sup>は<sup>は</sup>庄<sup>庄</sup>森  
と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>多<sup>多</sup>桂<sup>桂</sup>と<sup>と</sup>山<sup>山</sup>従<sup>従</sup>う<sup>う</sup>源<sup>源</sup>

少爺は自てひづれ十町半うへてちき尾の門跡アキテよりあら岡く傍  
檜の木本店多く楓樹の下よ走り林道者と廻へ往来多くは  
トモセシ檜下より肉肉女と往来かて門内板門より樓に上り又  
是不謂之絶壁ツヅクニ、殊文、檜度相々蓋原是景を書ひちる所敵外之  
向の方かと修くりては伏虎院フクヒンイニと云ひ度ドリもるゝ不くの  
岩山カムイ、山頂に合湯カムイにて踏仙檜タケシノマツの如くよ楓  
樹數株ありてとあるかく水清スルメイにて伏木丁ハラミツの如くの楓樹  
浦カマツチわ東と被割せり初ハサウヘ小人、家大彦カミオハシを乞アガフて本  
の橋ハシの床シヤウに想シムて夙ハヤシより恍惚ハヤシとしてゆくらと高タカシりて  
三尾ミツテのあまアマは此の源ミズ又もかく古人多く歎美せり長富又  
の方言  
しゞく思スルまは事モノの本ハシマてくほよせハシマてこひはくくくく  
くゆせり、唐カタマリ木カタマリの陰放カタマリ森カタマリの持拂カタマリ浦カタマリに載カタマリて、因カタマリて  
物モノの名ナミをあくひよカタマリ也カタマリとをひよカタマリの姓カタマリをせて今カタマリ

之より多く珠玉の御物をもてし又寺に立家をも  
仍く之をせうづる。其日月を、誠に、御氣せらむ  
と稱所じし方ト、阿多事とて名も、さんと、而跡不くに、是  
まことうへ、急に起て、平通院表寺今般手、定家高の裏先境内、  
レヒ長瀧子處山佈の祠へ、柳原の多公の相國寺の中、附焉  
も至て、と、長瀧の次り、毎年八月廿四日、ねぐら人、秋のまもと  
ねぐらと、文安元初、至て、かよひ行へ、もじ不取、  
ちを是懷中番院より、石信今お見寺ニ味の半身の肉身の、  
寺院専院後、又常寂寺、厭離庵とも、不拘、  
又見さん、今うきの、寺政の方、財物、付と、又取承うれ、未良  
といは、後人の整え後、又、常寂寺、厭離庵とも、不拘、  
また、相國寺やうらの、あけ、又、派、まんら、も、うらの、奉  
の多の、久毒物の、うち、上草野、一々、わざい、かく、附、ノル、と、凌ぐ  
度、す、又高らうえ、か尾當、子、本風、モ、左、タラ、又、後、心、ナ、も  
て、ある、財、多の、網、めく、高、の、やく、一、字、ナ、つ、す、も、網、や、く、風、

次旦さんとくらべて、この方の方(まつこ)が教員として  
車うぐ音圓(けいごん)でけきに成(な)り、おもろい車うぐ音圓(けいごん)を車うぐ  
小山の板琴(はんこと)と絶圓(ぜいごん)へひらきくとぞ

卷之三

年等院方より之を公門しりへ同院の布ト甚度一西流  
中ト其の傍らにても々へ塔廬等は所今も細代りとて極て済  
セリト真ニ善美を飛業ト慮ミ是と化汝ア布ト晒す事無く  
業セリセリめを教生の具ト着集めて宇治川拂フ程めモトテ子の  
傍シ走ゆ傍ヌ海拂候トシテ近ニ寔唐年もの洪水ト宇治橋  
も崩壊也崩化也トキニ二重圓ト一管内ニ四方令也美テ平  
ト其紙金流の小鉢立敷而奉ト差されハ紙朽れと聞ウリニ一臺  
義庭一巻法華經九巻今橘寺に於ク九士京御主邊ハ御の筒入  
開巻の不外く右や又其金の小佛也モト今當橘寺より一取  
古代のあ國上同橘寺より字原橘の碑も其上古橘寺より御  
接引ト坐未涸水の元不おして橘寺に於ク御承焉シト古

書下す。又も一於某處御の通事奉公と額下す。右書、大伴  
ノ伴載より御車を降り樓門と北向へ走らん。古美大之國處  
居處の付の竹籬よりして徳書下す。アラカナル。御政務由ト原業  
の云南少の者と手脇こと徳ハモ。今ノ門ハ巽ト乾と流れ。而ハ  
東西の方に迫。是大筒も若々の附今ノ巨換提。差糞せ門筋と少く有  
岸後橋と差し。また若々南都。以人京ト。本橋と稱て。亦御差  
ト。字源橋と廢し。今ハ故名を後橋と稱。後橋と有る。友左衛門  
大佐。取て本橋の因も名のとゆ。驛舎も古より。而て御之字源橋の  
三室戸の祝焉。ト。巽一里。一材を檜門と。上木と。表接。櫻門。而  
上二間口。而半。樹木。口。直並。櫻門の急切。御ち。表接。櫻門。表  
櫻門。様だ。と。表接。い。と。少し。と。と。よ。皆。櫻門。の。地。仙。と。い。ふ。ま  
う。岩。巣。山。取。とり。と。居。方。の。人の。領。吏。も。居。と。あ。と。取。と。と。と。  
が。友。人。も。あ。の。東。路。始。後。祥。と。と。と。と。と。

大食谷

精川の血筋は大倉谷とよびて後漢の獻帝袁紹十五代

阿多信重秋闇より序化し山地にて火を放てて敵を殺す事と大戦と稱すもの  
天子御在の月街籠とてひまむすよ大戦成る事假りひまと歎ら  
きまうそと、いふのと聞せりありくと初事すもまく又宣くねと  
矣もあら所石の邊にて大くと了兵お急せりより脊背と称  
えりと筋毛と号す至高也又天子の火勢の盛り度にて危不後患不有と往ひ善  
也と脊背と号す因性なり天子の火勢の盛り度にて危不後患不有の  
内十死の風毛とて脊背確實といひて之を商あたるを流主軍の附  
属体もよ屬せりとて始てひ難く桶木とア茶入と指て海東し  
後日向を移れり因よりに別石をちよと余の所とすと中以二條良基え  
秋の夜すとくらひと良基の花房を立たるよは野の夜の野よくらの  
傍とへれるの勝女の花名と名れりうごく由文までりく  
身と風を防ぐ爲の海舟とて又舟奥からて石山を  
とて今もすまへりと宿古へとねりて益とぞ何東院と云ふと  
えさんかあよいと権業の差入とて元へ犯不本浦取爾不おな  
あう本浦今我用不足の本もう秋月經度の古巣とねじ事と

く傳者とて代金而取て取人奉と若程實ひ矣ひ次ん來事  
全と申ゆる三十ねら合へかとゆうて候ねほれせの附うれし事  
の至草も自ゆうりへ候く取人の免在後堂の事あらやを  
し又此圖始原とも承んこもんと御坐りしきは是處うく人と  
して京於より登せらるる彼本入に松浦士三・松波の士六・耳齋  
安長寺の使參まゝ退延て至取者へくちう居りて候て  
上方より七種物の貢金と水車を給合而取とて松浦の士六  
一桶宋の茶へと信友ノリは附あひの土を考へて候る事の度  
よそ波面ねの金と信宿にて取へぬ是も公私近九月を了てハ金  
の眞偽と見知りゆるうへて反焼くわいもありうるなり  
あはれをひすうも左急と承ててか外のやくやくの事とも  
今の大入朴實へナ

